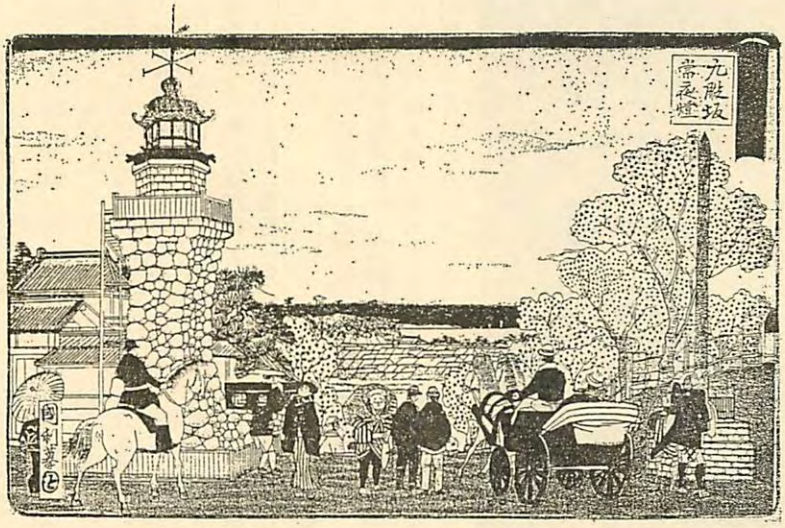


東京名所　九段坂常夜燈　梅寿国利　明治十三年頃（靖国神社遊就館所蔵）

マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦歿者慰族会）
〒103　東京都中央区
日本橋人形町1－8－2
電話 03－3661－8760
振替口座東京0-93487番
編集兼発行人　佐藤宗丕

平成三年 慰霊祭 総会 直会の御案内

会長　佐藤宗丕

会員並びに会友の皆様にはお健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申しあげます。

恒例の慰霊祭と総会を次の通り行いますのでお知り合いの方々をお誘い合せ御参集下さい。

日　時　平成三年四月七日（日）

午前八時三十分　靖国神社参集所集合

慰霊祭　**今年は午前九時から**　拝殿　本殿

受付・懇談　午前十時より十一時

会場は昨年同様靖国会館です。

総　会　午前十一時より十一時三十分

※受付、懇談は各島毎に行います。

本号に同封した私製はがきには、慰霊祭に参加しない方も必ず全部の欄に記入して二月末日迄に御投函下さい。

このはがきを原稿として会員名簿を新しく作りますので、楷書ではっきりお書き下さい。

◎九段会館に宿泊を希望される方は、代金を添えて二月末日迄にお申込み下さい。料金は一室五人の相部屋で、一泊二食付一人七、六二二円の特別割引（30％）価格です。申込み後の取消しや変更は直ちに左記に電話して下さい。

〒102　千代田区九段南一－六－五

九段会館　宿泊部（電話03－三二六一－五五二一）

その時は本会にも電話でお知らせ下さい。

◎第二二回直会（なおらい）旅行会を次の通り行います。人数に限りがありますので早目にお申込み下さい。

（以下20頁へ）

目次

平成三年慰霊祭 総会 直会の御案内　会長 佐藤 宗丕……1
世を照らす九段坂の高燈籠……2
創立十周年を迎えた靖国神社奉賛会……2
現地慰霊を希望する方々へ……3
南の島々……蓮尾 諭吉……4
環礁ミレー抄（15）……成宮芳三郎……6
北満からマーシャルへ（2）……秋元 輝夫……7
ウオッゼ島の現況図……秋本 英郎……8
ブラウン環礁の玉砕（5）……矢野 雄三……9
島は八百 マーシャル群島……能仲 文夫……13
お便りの中から……14
米田 トシ　宮下 礼子
西村 幸　青山アヤ子
牛山 光子　奥山 きの
南瀛の碑に……矢沢 英子……16
両親に宛てた最後の手紙……16
フィリップ・R・ハリス司令官からのお便り……17
いま タラワで合気道……18
本部だより……18
名簿訂正（5）……19
寄付者芳名……19
事務局日誌……19

世界を照らす
九段坂の高燈籠

平成二年六月二十日夕刻五時、明治の灯火が甦った。

靖国神社に参拝する人々の足元を照らし、東京湾の船の安全を守ってきた九段坂上の高燈籠が約十ケ月に及ぶ修復工事を経て、明治四年に招魂社の常夜灯として建立された当時の姿に復元された。

東京名所、九段坂上の高燈籠は、明治二年六月東京招魂社として創立された靖国神社の御本殿が竣工する前年の明治四年十一月から点灯された。

その位置は現在の田安門側でなく、靖国通りを隔てた向い側の旧偕行社敷地内であった。

1頁の錦絵は、靖国神社を背にして東京湾を見渡した風景である。

右端の剣碑は、明治十二年十二月、西南戦争の戦歿者慰霊顕彰のため近衛隊より奉納されたもので現在の田安門入口三角点附近である。画面中央の海に白帆が浮んでいる。左端の高燈籠は春日燈籠の形で、自然石組立の高度な伝統技術に、玻璃（ガラス）や風向計を用いた洋風進取的な気概に満ちていた。総高さ十七米、工事期間に一年三ケ月を要した。

爾来百二十年の間に、二度の地震、空襲等の被害に加え鉄部の腐蝕等で満身創痍の有様であった。

神社御創立百二十年記念事業の一つとしての修復工事は、文化的歴史的価値を尊重し、石造部分はそのまま残し、骨組みはステンレス鋼で構築し、旧御本殿屋根の銅材等を使用して、半永久的に復元された。但し管理上の点から外部の階段はつけられなかった。

光源は高圧ナトリウム灯で三六〇ワット。毎夜日没から午後十時まであたたかく人々を照らし、世を照らし続けることであろう。

六月二十日の清祓式のあとの点灯式には末永い燈籠の生命に若い息吹を吹き込ませたいとする松平宮司の念願から、神社職員最少年十八歳の岩崎玲子仕女（みこ）により点灯スイッチが入れられた。

（やすくに第四二一号より抜き書）

創立十周年を迎えた
靖国神社奉賛会

お国のために尊いお命を捧げられた二四六万余柱の英霊をお慰めし御遺徳を顕彰するために靖国神社の末永き御安泰を願って奉賛会が発足してから十年になりました。

感謝状
マーシャル方面遺族會殿
御祭神奉慰の御特志を以て真心こもる浄財を御奉賛頂き洵に有難く茲に創立十周年に當り深甚なる感謝の意を表します
平成二年六月十四日
靖國神社奉賛會
會長　大槻文平

平成二年六月十四日、創立十周年記念奉賛金奉納式並に奉納奉告祭が、関係者二五〇余名参列のもと、拝殿及び御本殿で厳粛に挙行されました。

十年間に奉納された浄財は十一億円余となり、神社整備十ケ年計画の完遂に役立った由が松平宮司から報告され丁寧なお礼が述べられました。

式後記念撮影の後、創立この方真心のこもる高額の奉賛をした法人一九二社、個人一六八名、戦友団体二二、遺族団体二に対し感謝状と、松平宮司からの記念品（色紙）が贈られ、本会もこの光栄に浴しました。

当日記念品として松平宮司よりいただいた色紙は四月七日の総会の時御覧いただきますが、色紙揮毫の趣意を松平宮司よりお伺いいたしましたのでその要旨を書添えます。

『祖父松平春嶽が、安政五年六月二十四日、水戸の徳川斉昭、慶喜、尾張の徳川慶勝と共に、（登城日と決められていない日に）押し掛け登城し、井伊大老に対し、勅許を得ないで日米修交条約を結んだこと等について詰問したので大老が大いに怒り、七月五日隠居という厳罰に処せられた。

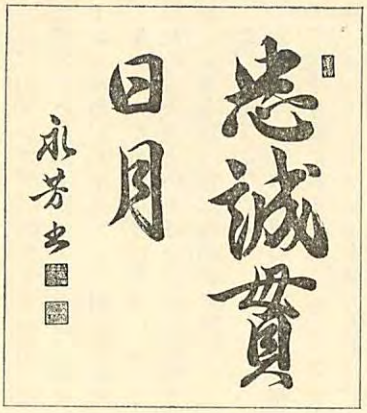
祖父はその夜直ちに腹心の家臣橋本左内を呼び次の書面をしたため、長年終始変わることなく忠誠をつくしてくれたこと感服の至り、決して早まることのないようにと戒めた。

「厳科を蒙り候は、覚悟の処、今更驚駭せず。これ迄の忠誠日月を貫き候は感服萬々、家臣の罪を蒙り候に及ばざりしは、国家の幸甚に候（中略）。愕然の餘り、卒爾の義これ有り候ては、我を見捨て候也。」

祖父春嶽が家臣橋本左内に与えた書面の中の「忠誠貫日月」の文字は、私の好きな言葉であり、又今日生を得ているわれわれが、御祭神に対し申し上

げるべき最もふさわしい言葉として書かせていただいた次第である。』

尚、六月十四日、同会の理事会で、会則の一部が改正されました。それは「奉賛会設立以来絶大な支援をいただいている戦友会や遺族会の皆さんは一段と高齢になられたので、この際賛助会員（会費年額一口（一千円）以上を納める者）の制度を新しく設け、より多くの会員から奉賛を仰ぐことに」したものであります。



（松平宮司の揮毫）

本会は早くから靖国神社奉賛に微力をつくしてきましたが、会員の皆様にも奉賛会に加入されるようおすすめし、大ぜいの方々の御協力を頂いております。

◇　◇　◇

本年一月一日から、東京二三区内の電話局番がすべて四ケタになりました。

現地慰霊を希望する方々へ

日本遺族会及び厚生省主催の現地慰霊の予定については「環礁」53号でお知らせしましたが今の時点（平成二年十二月）での情勢を申述べます。

一、日本遺族会主催の慰霊巡拝

A班・マロエラップ、ウオッゼ

B班・クェゼリン

C班・タラワ

▽平成三年三月十二日～三月十九日

▽参加費は各班とも約四十八万円

申込締切は一月二十日

▽問い合せ並に申込みは

〒102　千代田区九段南一―六―五

㈶日本遺族会福祉事業部

電話　03―三二六一―五五一一

（御参考）　十二月一日現在での参加申込者は次の通りの由です。

A班　西田　恒子　吉田　操
坂本　武夫　川島美恵子　久保田光子
徳田　叶子　中山　きわ　新井　武次

B班　大石　範三　清治　政次
清治冨士江　吉良　正義　馬場　直人
馬場　ヨネ　並木　三郎

C班　西口　直生　小寺　洋子

二、厚生省主催の慰霊巡拝

実施の時期、訪問先、参加資格、条件等は正式の発表のあるまではわかりませんが、本会の次の「環礁」は八月一日発行なので、あらかじめ参加を希望する方を記録しておき、今後このことについて厚生省の発表、その他の情報、連絡や申請などについては、参加を希望することを通知された方に直接お知らせすることとします。

過去の実績から推測しますと、正式発表は平成三年四月以降で、訪問先は、マーシャル諸島（クェゼリン、ルオット、マロエラップ、ウオッゼ、ブラウン（エニウェトク）

ギルバート諸島（タラワ、マキン）のうちから選定されると思います。

実施時期は平成三年八月下旬から平成四年三月までの間の約十日。

全員が東京（厚生省）に集合して結団式を行い、慰霊団を編成して、成田からグアムを経てマジュロに到着。「東太平洋戦没者の碑」の前で合同追悼式を行った後、前記各班毎に縁故の島をたずねて慰霊することになりましょう。

過去の実績は「環礁」46号、47号、51号をお読み下さい。

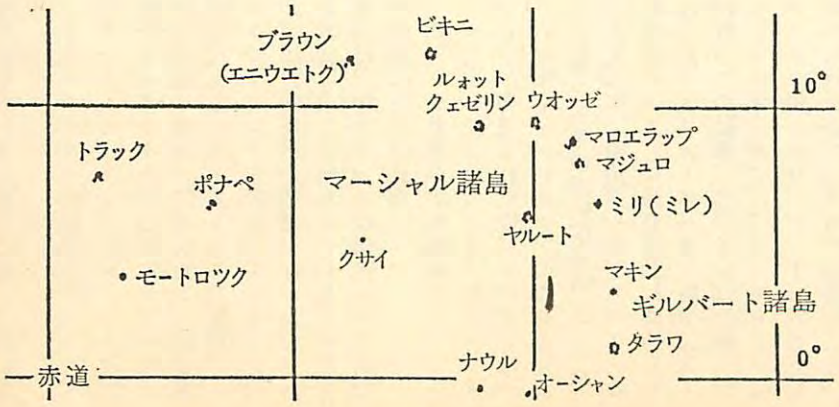
何分にも半年以上も先のことなのでその時にならなければわからないという方も、行きたい気持のある方は、「環礁」53号2頁をお読みの上参加希望と通知を下さい。正式申込みの時取止めても一向にかまいません。

十二月一日現在で厚生省主催の慰霊に参加を希望している方は次の通りです。

◎クェゼリン、ルオット、ブラウン

荒木　常子　池田　淑子　池田　幸夫
寺西　ヒサ　遠藤　安男　佐竹　エス
冨田　ミツ　冨田　キミ　服部くにゑ
浜田　芳枝　増田　将三　山本　きく
松木　孝子　長岡　仙一　矢野　雄三
山森　久江

◎タラワ、マキン
塚原　ハナ（又は子供）



南十字星の見える島々

蓮尾諭吉

はじめに

大東亜戦争の大きな舞台の一つであった南の島々を理解するために調べたことを以下に記してみます。

一、六大州

地球上の地域は便宜上六つの大きな区分、(1)アジア州、(2)アフリカ州、(3)北アメリカ州、(4)南アメリカ州、(5)ヨーロッパ州、(6)オセアニア州（大洋州ともいう）に分けて呼ばれている。このため六大州といえば全世界を意味する。（お手許の世界地図御参照）

二、オセアニア

オセアニアは六大州の中で最小の州で、太平洋にあるオーストラリア大陸、ニュージーランドを始めとして、ⓐポリネシア、ⓑメラネシア及びⓒミクロネシアの三諸島群に属する島々の総称である。

ⓐ　ポリネシア（多くの島の意）

ポリネシアは太平洋上に散在する諸島のうち日付変更線（一八〇度の経線）の東半にある島々の総称で、それらはハワイ（アメリカ領）、ニュージーランド及びイースター島（チリ領）を結ぶ海域にあるフェニックス、サモア、ライン、トンガ、ソシエテ、クック、タヒチ、ツブアイなどがあり、大部分が火山島と珊瑚島である。独立国は西サモア、トンガ、ツバルなどで、他は米、英、仏、ニュージーランド領となっている。住民は主としてポリネシア人で、使用言語はオーストロネシア語族の一語派であるマリオ語（ニュージーランド）、サモア語、タヒチ語、ハワイ語などである。

ⓑ　メラネシア（黒い島の意）

メラネシアは東経一八〇度以西、赤道以南の区域で、オーストラリア大陸の東北岸に沿って北西から南東に弧状に連なる島々の総称。ニューギニア（政治的には島の西半分はインドネシア領、東半分はパプア・ニューギニアとして独立している）、ビスマルク、ソロモン、ヴァヌアツ、ニューカレドニア、フィジーなどの諸島がある。住民は黒色系人種のパプア族と狭義のメラネシア族（ニューギニア以外に点在）に分れる。握り棒を唯一の農具とする原始的な農耕をしている。宗教上では超自然的な霊力、呪力などを信ずる典型的なマナ観念のものである。

ⓒ　ミクロネシア（ごく小さい島の意）

ミクロネシアは西太平洋の東経一八〇度以西、ほぼ赤道以北（メラネシアの北）に散在する二千百余の小島嶼群の総称で、マリアナ、カロリン、マーシャルの諸島からなる。キリバス（ギルバート諸島）を含める場合もある。島の面積二七三〇平方粁、海域は南北二千数百粁、東西四千数百粁となっている。住民はチャモロ、カナカ両族が多い。（附図御参照）

三、ヨーロッパ人によるオセアニア方面の発見

六大州のうちオセアニアは他の州と違ってヨーロッパから遠く離れているうえに、広大な太平洋に多くの小島が散在しているためなどにより、ヨーロッパ人の目に止まることが遅かった。

イタリア生まれの探検家クリストファー・コロンブスはスペインの女王イサベル一世の援助によって大西洋を西航し、一四九二年アメリカのフロリダ半島南東方にあるバハマ諸島のサンサルバドル島に始めて到着し、新大陸発見の端緒を作ったが、これに引続いてポルトガルの貴族で探検家のフェルディナンド・マゼランはスペインの王カルロス一世の援助を得て一五一九年九月五隻の船で出発、一五二〇年一一月マゼラン海峡を発見してここを通過、さらに太平洋を横断し、一五二一年三月苦難に満ちた航海の途中グワム島を発見した。その後フイリッピンに達したが、原住民との交戦でマゼランは戦死した。しかし彼の部下は航海を続けて一隻が一五二二年九月に帰国、最初の世界周航を完成させた（種子島に漂着したポルトガル人によって日本に始めて鉄砲が伝えられたのは一五四三年であった）。

イギリス軍人で探検家のジェームス・クック（通称キャプテン・クック）は一七六八～七九年三回にわたって太平洋方面の探検、調査を行い、諸小島を発見とくにオーストラリア東岸、ニュージーランドを探検してイギリスの太平洋方面進出の基礎を作った。クック諸島は第二次航海中一七七三年に発見した。なおクックは帰途ハワイ島で原住民に殺害された。

四、ミクロネシアの島々

マゼランによってグワム島やフィリッピンが発見された後、スペインは一五六五年にミクロネシアの所有を宣言し、以後三三年の長い間領有していた。一八九八年（明治三一年）スペインの植民地キューバの独立運動に関連して起ったアメリカ・スペイン戦争（米・西戦争）の結果、スペインは敗れてフィリッピン、グアム、プェルトリコはアメリカ領となり、キューバは独立を認められたがアメリカの保護国となった。なおスペインは財政難のためグアム以外のミクロネシアをドイツに売却した。

第一次世界大戦（一九一四年六月～一八年一一月）の後、ドイツ領であったグアム島以外のミクロネシアは国際連盟から委任されて一九二〇年以降日本が統治してこれらの島々を南洋群島と呼んでいた。

日本は南洋庁をパラオ諸島のコロール島に、支庁をサイパン、ヤップ、パラオ、トラック、ポナペ、ヤルートの六つの島に置いて南洋群島の運営に当たり砂糖、椰子油、コプラ等の生産、燐鉱の採取、漁業などを盛に行っていた。

ミクロネシアには前述の通り、ⓐマリアナ、ⓑカロリン、ⓒマーシャルの諸島がある。

ⓐ　マリアナ諸島にはサイパン、テニアン、アナタハン、グアムなど一五の島々がある。住民は主としてチャモロ人である。

ⓑ　カロリン諸島はパラオ、ヤップ、トラック、ポナペなど比較的大きな火山島と五〇〇を超える小島がある。原住民はミクロネシア系が主。

ⓒ　マーシャル諸島にはエニウェトック（ブラウン）、ビキニ、ロンゲラップ、ウォッゼ、クァジャリン（クェゼリン）、マジュロ（メジュロ）、ヤルートなど三四の島（環礁が主）と八〇〇余の小礁がある。原住民はカナカ族。

（注）諸島とは一定区域内に散在する二つ以上の島の集まり、群島は比較的狭い海域内にまとまりをもってむらがっている島々。今は区別をしないでおおむね諸島と呼んでいる。

五、大東亜戦後のミクロネシア

ミクロネシアは第二次世界大戦（注参照）でアメリカが占領、一九四七年国連（国際連合）の決定によりアメリカの単独信託統治領となったが、民族自立の気運もあり、現在では五つの行政区に分れている。

(1)　グワムは一九五〇年正式にアメリカ合衆国の准州となった。

(2)　マリアナ諸島は一九七八年に「北マリアナ連邦」となった。

(3)　カロリン諸島中のパラオ諸島は一九八一年に「ベラウ共和国」として

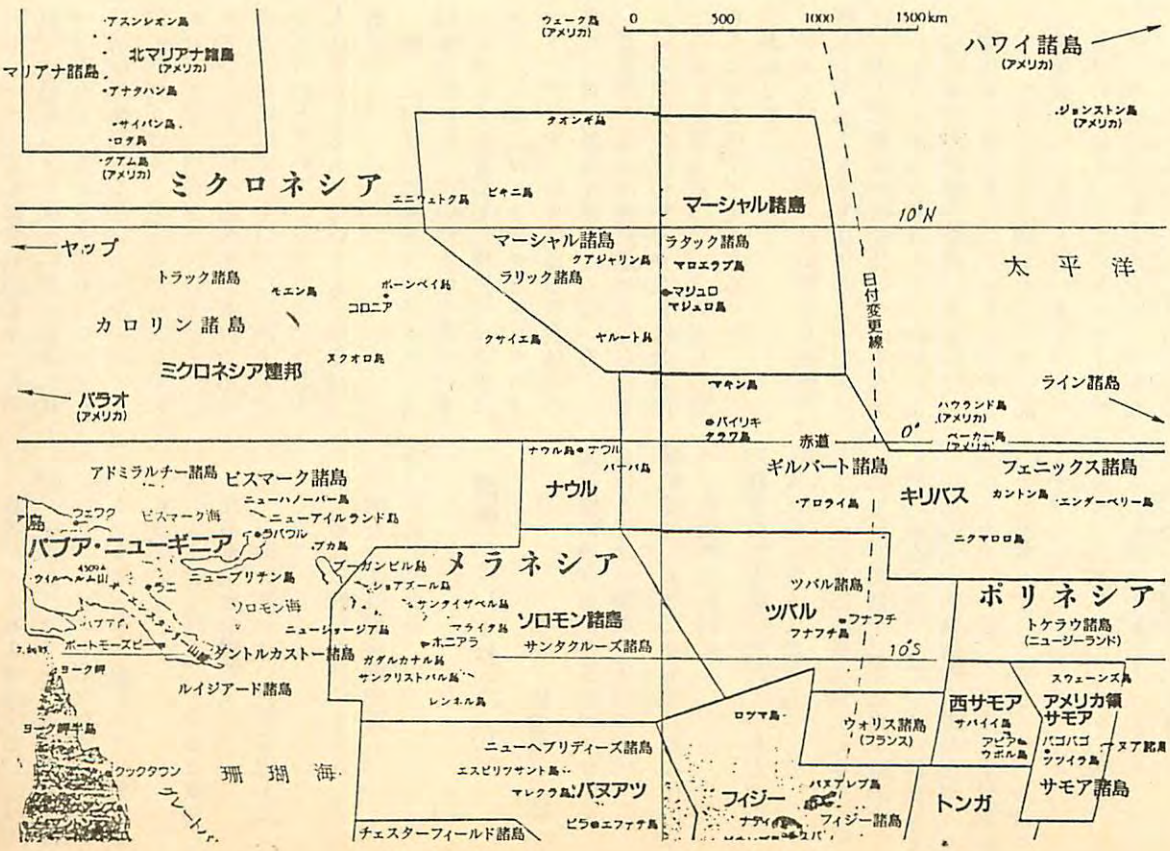
(4)　パラオ以外のカロリン諸島は一九八六年に「ミクロネシア連邦」として

(5)　マーシャル諸島は同じ一九八六年に「マーシャル諸島共和国」として、

それぞれ独立国となった。しかしこれらはいずれも完全独立ではなく、アメリカと自由連合協定を結んでいる。この協定は一五年間の財政援助（各国の国費の五〇％前後に達する）と引換えにアメリカが軍事利用権と外交権を従来通りに行使し、それぞれの自治政府には内政と一部の外交権を認めて民族自決の動きに対応するようにした。

本遺族会と関係の深いタラワ島とマキン島（ブタリタリ島）はマーシャル群島の南にあるギルバート諸島（ポリネシアに所属）の中にある。ギルバート諸島は近くにあるフェニックス諸島、ライン諸島などで「キリバス共和国」を形成している。これらは一九七九年イギリス植民地から独立したもので、主都はタラワ。

（注）第二次大戦のうち太平洋地域が戦場となった日本と米・英・オ



ランダ・中国などの連合国との戦争を太平洋戦争というが、日本では大東亜戦争と公称している。

六、マーシャル諸島共和国

マーシャル諸島共和国を形成している島々は中部太平洋上の北緯四・五度～一五度、東経一六一度～一七五度、一二五万平方粁の海域にあるラタック列島（日の出列島―東側）とラリック列島（日の入り列島―西側）といわれる二つの火山帯上に点在する三一の環礁（アトール）からなっている。これらの中にビキニ、エニウェトク（ブラウン）、ウォッゼ、マロエラップ、クァジャリン（クェゼリン）、マジュロ（メジュロ）ヤルートなどがある。マーシャル諸島共和国については

(1) 面積は一八〇平方粁（平戸島とほぼ同じ大きさ）。

(2) 人口は三七、五五六人（一九八三年）、首都マジュロの人口は一二、七四七人で、人口構成はカナカ族及びアメリカ人、ドイツ人、日本人との混血。

(3) 言語は英語及びマレーシア語であるが年配者の中には日本語の分る者もいる。

(4) 政体は大統領制で現在の元首は自治領発足以来日系人のアマタ・カブア大統領（元マーシャル諸島の大酋長）（三選）で、政情はきわめて安定している。議会は一院制で議員の任期四年、内閣は大統領の外大統領が議員の中から任命する一〇名の大臣で構成されている。

(5) 外交関係はアメリカとの自由連合関係に基づきアメリカから財政援助が行われていることもあり、緊密である。同国はかつて日本の委任統治領であった関係で日本に対する期待感は大きく日本との関係促進を考えている。

(6) 経済的には農業（コプラ）及び水産業が主なものであるが、コプラ油の輸出が外貨獲得の貴重な財源になっている。水産業は今後の振興に待たねばならず、現在は日本、韓国、台湾などの漁船に漁場を解放して入漁料を得ているに過ぎない。今後の課題はいかにして経済自立を達するかにある。

日本との経済貿易関係は同国の輸入総額一七五〇万アメリカドル中日本からの輸入は約三百万ドル（一五％）で自動車、建設機械、日用雑貨が主なものである。なお同国からの日本に対する輸出はほとんどない。

(7) 気温は年間を通じて二五～三二度であるのでここでは服装はきわめて簡単なものですむ（男ならばTシャツに半ズボンとゴムぞうりでよい）。

(8) この地はほとんど珊瑚礁で土がないため耕作物はほとんど取れないので魚介類、ココナッ、パンの実、バナナ、たこの木の実、豚、鶏以外は賄えないので、米麦などの主食はすべて輸入に頼ることになる。

(9) 一つの家には家族が多く見られ、子供は五～六人から多い場合には一〇人近くいるようである。これで人口増加が爆発的でないようなのは、子供の病死が多く、老人の寿命が短いためなどで平均寿命が五〇才未満といわれていることに原因があるものであろうか。結婚は早いものでは一四～五才から行われているようである。なお大人は男女とも太っている人が多く見られる。

(10) 二百年前にキリスト教が入って以来各島に伝っていた古い宗教や行事などは全く姿を消し、現在では宗教はキリスト教（カソリックとプロテスタント）だけで、島々にある教会はその島で一番立派な建物となっている。

最近の若者には教会離れも見られるが村の実権を持つ年寄りたちは教会内での高い位置も兼ねているので島の暮らしに教会は不可欠である。

おわりに

日本と南方の島々は以前から関係が深かったこともあり住民の人達の中には日本人に親愛の情を持っている人が多いようである。我々としては島によっては英霊の慰霊碑を預って頂いている関係もありこれらの人々と益々仲よくし、できるだけ援助もして、よい関係を促進したいものと思います。

今後の援助についての私案としては

(1) 珊瑚礁の島を造成して面積を殖やすとともに客土をして野菜類の栽培ができるようにする。

(2) 礁湖（ラグーン）に漁礁を設けたりプランクトンを育成し、ラグーン全体を養魚池として漁業を盛にする。

(3) 天水を処理してそのまま飲料となる水道水を供給する。

(4) 石油を使わない発電装置を導入する。

(5) 単なる燃却だけによらない合理的なゴミ処理装置の導入。

などが考えられる。

環礁「ミレー抄」（15）

会友　成宮芳三郎

飛行機に飛びあがりざまマフラーを
ま白くまけり爆風受けつつ
爆撃機遠く去りたりものいはぬ体いく
つぞ硝煙の切れ間に
阿修羅のごと戦ひ疲れしつわものを
土人は椰子蟹もてねぎらふ

（注）成宮芳三郎様は大正元年長野県に生れ、昭和十二年に東京帝国大学医学部を卒業。マーシャル群島ミレー島の六十六警備隊軍医長をつとめられました。若くして佐々木信綱先生に師事し、日本歌人クラブ会員です。

「成宮芳三郎歌集」の中から環礁九号以来二十四首を紹介しましたが、本号から引つづき掲載いたします。

北満からマーシャルへ（2）

＝或る陸軍部隊の苦闘＝

秋元輝夫

曲射砲小隊長　邑義宣中尉　以下一八九名を駆逐艦「海風」にてウオッゼ島に、第六中隊　二〇六名（中隊長　佐藤政雄大尉、指揮班長　比恵島光雄准尉、第一小隊長、松木音三少尉、第二小隊長　小沢篤行中尉、第三小隊長　嘉瀬俊造少尉、機関銃小隊長　伊藤一雄少尉、曲射砲小隊長　熊谷哲雄中尉、今村信夫軍医中尉ほか　一九八名）を駆逐艦「海潮」にてマロエラップ島に派遣、機動第二大隊主力はウォッゼ島に進出すべく待機中であった。

（機動第二大隊主力「工兵隊2コ小隊通信隊の一部配属」並びに第三大隊第七中隊及び配属の迫撃砲一ヶ小隊は、クェゼリンに於てその後昭和十九年二月五日、我れに数十倍する米軍上陸部隊と交戦、夜襲を繰り返し、奮戦激闘遂に全員玉砕に至る。）

海上機動第一旅団先遣隊　ウオッゼ島上陸

大隊本部先発員及び第四中隊は昭和十九年一月十二日（水）夕刻、マロエラップ島爆撃、ウオッゼ島空襲警報発令中のなかを急遽、駆逐艦より下艦、交代転進する南洋第一支隊第二大隊長古木秀策少佐指揮する第五中隊の一部第二機関銃中隊、第二歩兵砲中隊の一部、計二八〇名が駆逐艦「海風」に乗艦、クェゼリン島に向かう。

ウオッゼ島防備中であった南洋第一支隊の残余二一九名は、その後同支隊第五中隊長、高橋宗夫中尉（後大尉）の区署により逐次艇便を得てクェゼリン島経由ヤルート島に追及する予定であったが一月末より始まった米軍のクェゼリン島進攻のため転進不可能となり終戦までウオッゼ島に留まる。

南洋第一支隊とはフィリピン駐留中の第六十五旅団第百二十二連隊で昭和十八年七月十七日マーシャル群島派遣を命ぜられた部隊であり、その後昭和十八年十一月十六日、軍令陸甲第百四号により南洋第一支隊臨時編成を下令され改編した部隊である。

一月十二日（水）夕刻、ウオッゼ島に上陸した海上機動第一旅団第二大隊先発隊十名、第四中隊一九六名は駆逐艦に依る緊急輸送の為、携行食糧は一週間分弾薬一会戦分の装備であった。上陸当夜は一部、航空隊の空宿舎に入り、他は露営で夜を明かす。

一月十三日（木）ウオッゼ島吉見海軍第六十四警備隊司令に到着の申告を終わり、その指揮下に入る。ウオッゼ島防備計画に基づく配備を各小隊長に命ず。

一月十四日（金）先遣隊（本部先発隊第四中隊主力）は南地区の防備を担当、内海方面に位置し当面第一小隊（小隊長和田中尉）を北地区第四トーチカ右側内海方面に、第二小隊（小隊長鈴木《現片桐》准尉）を滑走路東端海軍機関砲陣地左側に、曲射砲隊（小隊長巴中尉）を滑走路東端外海第二トーチカ左翼に配備を完了する。南地区配備の南洋第一支隊機関銃中隊（中隊長松本中尉）と十九年五月迄、重複配備となる。五月以降松本隊は北地区に移動する。

一月二十九日（土）夜　第六十四警備隊司令　各部隊指揮官を集め（警備隊桟橋近くの陸上機指揮所と記憶）「一月二十六日以降の敵情報告と第四艦隊司令部の迎撃作戦用意の命令」を伝達し、米軍の進攻に対する防備の徹底強化を命ぜられる。

一月二十九日（土）夜中よりルーリック海峡、メーチェン水道方面に爆雷投下の光と爆音を聞く。

一月三十日（日）早朝より米機動部隊発進の小型編隊機群ウオッゼ島に来襲する。その数、前後約五百～六百機位と推定された。敵小型機の攻撃目標は主として、滑走路及び海岸線防御陣地に指向されて行なわれたと判断する。同日正午頃より敵艦隊（巡洋艦、駆逐艦数隻と判断）の艦砲射撃も加わる。夜に入り照明弾を打ち上げると共に、夜間射撃を一晩中行ない（神経戦術か……）これが為、戦士達は一睡も出来ず夜を明かす。敵の海空よりの猛攻撃は二月三日頃まで続く。

一月三十一日（月）午前、敵の内海方面よりの上陸に備え、主滑走路東端外海方面に配備した第二小隊（鈴木小隊）を急遽、内海旧警備隊桟橋付近に陣地の移動を命ず。

二月二日（水）早朝より部隊本部の防備するクェゼリン島に米軍の上陸が始まるを聞く。二月四日（金）クェゼリン島防備中の阿蘇部隊長（機動第二大隊長）より無線の連絡有り「これより全員、突撃に移る。貴官達の健闘を祈る」と受信す。阿蘇部隊長はこれを最後に生き残って居た将兵を指揮し、猛攻を続ける米軍に突入、祖国の勝利を願いながら壮烈な戦死を遂げる。二月五日（土）大型機の爆弾投下の割りに炸裂する数が少ない。後で時限爆弾と分かる。一晩中、爆発を繰り返す。二月五日夜、飛行艇二機来島、海軍の搭乗員を収容してトラック島に向かう。これが、友軍機の来島最後となる。ウオッゼ島に対する攻撃も、その後二月中旬頃までは小型機の編隊に依る銃爆撃と艦砲射撃による攻撃が散発的に続いたが、上陸の公算は少なくなった。三月以降は引き続き小型機編隊による銃爆撃の他、時折り近海を通過する艦隊の観測機が上空に飛来、弾着の観測を行ないながら我が砲台陣地及び重要建造物等に艦砲射撃を行なった。

十九年五月　南洋第一支隊機関銃中隊（松本隊）が北地区へ配備変更するに伴い六月以降、海上機動第一旅団第四中隊（秋元隊）の兵力を南地区に配備を変更し、編成替えを行なう。即ちこの時点で陸軍南洋第一支隊の高橋隊北地区、海軍第六十四警備隊中央地区、陸軍海上機動第一旅団先遣隊の塚・秋元隊南地区、各々に位置し昭和二十年八月、終戦迄、同地域に於てそれぞれ内海、外海の防備を担当する。

十九年九月頃になると敵機の空襲も少なくなり、毎日日課の様に偵察機の飛来と、付近を通過する大型機が時折り大型爆弾を投下して飛び去る位となる。又時には午前の偵察機上より日本の流行歌「支那の夜」等を拡声器に依り流し、降伏勧告ビラ等の散布を行なったりした。戦士達は音楽の時間が始まったと申し、壕の上で楽しみながら聞いて居った。

十一月後半ともなると定期の偵察機の他、引き続き降伏勧告のビラの他、捕虜になった戦士達のビフテキ料理の食事風景写真等の散布を行なう。その上、小型機の実弾射撃訓練も始める。小型編隊機の編隊を解いて急降下の仕方（2～3日）、急降下銃撃訓練（2～3日）、次は急降下爆撃訓練（2～3日）等、約、一週間位で一隊の教育を終わった様に記憶している。

（以下17頁へ）

ウオッゼ島の現況図について

常任幹事　秋本　英郎

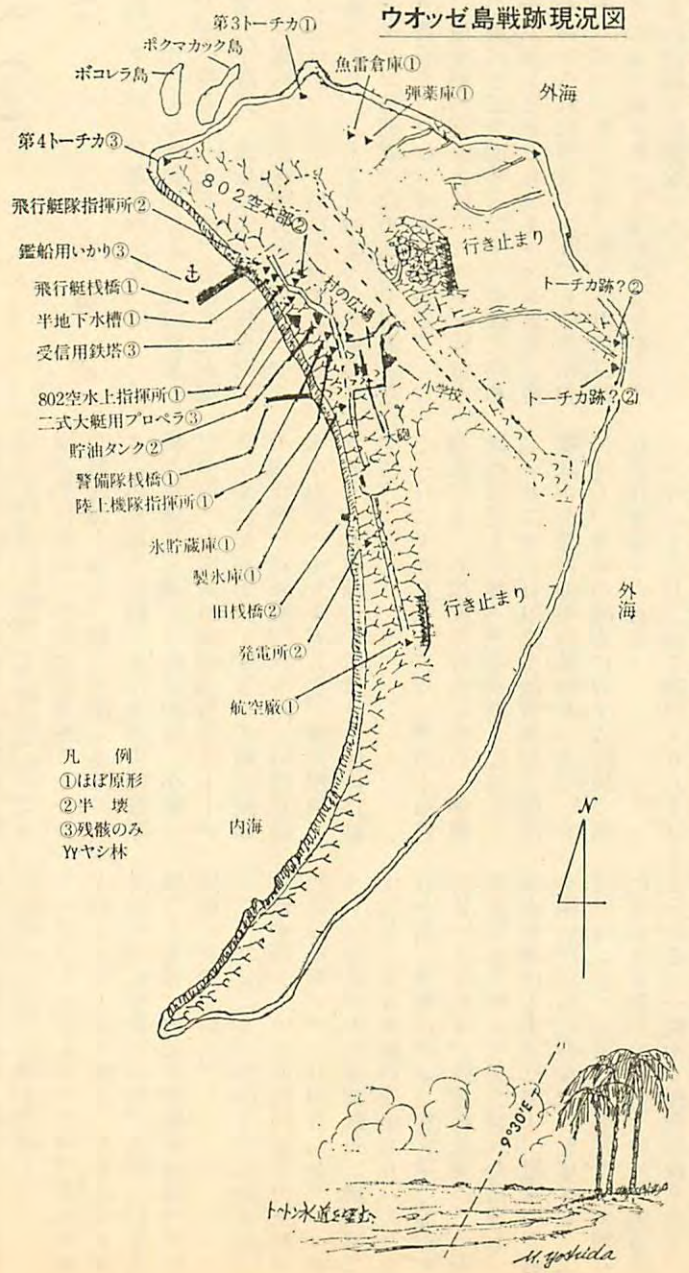
私は平成元年一月、厚生省主催の現地慰霊に参加し、ウオッゼ島に行きました。亡兄の戦死した第二砲台を訪ねたかったからです。永年の願いであったが二、三の事情で目的を達することができなく残念な思いをしました。

帰国後、今後私と同じ思いをする者のないようにとの願いから、島の現況図を作ることを考え、昭和61年8月から平成元年2月までの間に同島を訪れた方々が、実際に目で確認されたものやチャーター機上から撮影した写真を一つにまとめてみました。

この略図をB4版に拡大した図が本部にありますので、御入要の方はハガキでお申込み下さい。今後訪島される方々に、この図に訪島の年月日、歩行経路、時間、見聞したことなどを書き入れて本部に御提供下さいましたら有益な資料になるものと思います。

この図の中の、白地の地域は、在島時間が三、四時間では「村の広場」から島の奥まで入るには時間が足りません。Y印の所は椰子林で、概ね蔦や蔓草に覆れてジャングルになっており、人の入れる道も戦跡も確認されておりません。

島の奥を探訪するには、一、二泊の日程、厳重な身支度、斧、蛮刀などの伐採要具、携帯寝具、食料などが必要となりましょう。現地で勤務された戦友の方々の助言を頂くことをおすすめします。環礁52号16頁の記事も参考になりましょう。



ブラウン環礁の玉砕（5）

矢野雄三

満州曠野から南海の離島（リトウ）へ

――およそ一月前、昭和十八年十一月十六日、「軍令第百六号」により編成を下令された『海上機動第一旅団』は、満州のチチハル地区（黒龍江省）にあった第三独立守備隊司令部、独立守備歩兵第十一、第十五、第十六大隊を基幹として同月三十日、各大隊駐屯地の昂々渓、札蘭屯、白城子において編成を完結した。

十一月二十三日、軍令部総長は、聯合艦隊司令長官および第四艦隊司令長官に対し、次のとおり指示を発した。

【大海指第三百三号】（傍線筆者）

I、東部軍司令官隷下ノ海上機動第一旅団ヲ其ノ内地又ハ満鮮港出発ノ時ヲ以テ第四艦隊司令長官ノ指揮下ニ入ラシメラル

II、第四艦隊司令長官ハ右ノ部隊ヲシテマーシャル諸島方面ニ待機セシメ同方面ノ機動反撃ニ任ゼシムベシ

旅団主力は、十二月六、七日の両日チチハルに集結を完了、逐次同地を出発して十日～十一日釜山に到着。第三大隊は、九日白城子出発して十三日朝釜山に集結。十二月十四日、丁船団第一分団の輸送船「但島丸」（輸送指揮官西田祥實少将）「日美丸」（同・矢野俊雄大佐）の二隻に分乗、また同時期クサイ島へ派兵される「南洋第二支隊」（長・原田義和少将）の第二分団（日蘭丸、良洋丸）とともに釜山を出港。護衛駆逐艦は「海風」「涼風」「潮」の三隻であった。

――ところで、筆者の手許に、翌十九年二月ブラウン環礁「メリレン島」で玉砕した陸軍士官（海上機動第一旅団第三大隊配属）が遺した「陣中日誌」がある。この日誌（『塩野谷日誌』）を手がかり、部隊の移動、南進を追ってみることにする。（一部割愛）

この日誌は、塩野谷正准尉（当時）によって綴られたもので、同島占領後に米軍が押収、その後、マーシャル方面「米海兵隊戦史」編纂のため日本側の史実考証を「防衛庁戦史室」に依頼してきた際、米側から英訳文の形で提供された。送付者は、海兵隊司令部G－3（作戦）戦史室長J．F．ワグナー海兵大佐と記されている。

12月6日　白城子デ家族ヲ内地ニ帰スタメノ準備ヲ売了。部隊長官舎デ我ガ家族共ニ夕食ヲトル。大イニ飲ミ且ツ酔ヒ、妻ニハ何モ言ハズニ別レタ。淋シク思ッタニ違イナイ。子供達ハ何モ知ラズニ眠ッテイタ。

12月11日　部隊ハ奉天ヲ通過、夕方安東着。南下スルニツレ段々暖カクナル。

12月12日　終日、朝鮮ヲ通過スル。

12月13日　朝、釜山着。荷物ヲ積ミ替ヘテ乗船。

12月14日　前日カラ終夜、船デ作業。一六〇〇出航、大陸トモオ別カレダ。船ハ日本本土ヘ向カフ。途中、関釜連絡船ト出遭フ。乗客ガ旗ヤ「ハンカチ」ヲ振ッタ。大イニ感動ス。

12月15日　一三五〇カラ引続イテ爆発音ヲ聞ク。敵潜水艦ノ攻撃ヲ受ケツツアルト知ラサレ、離船ノ準備ヲスル。聞クトコロニ依レバ、敵ハ我ガ船団ニ対シ魚雷約二〇発ヲ発射シタルモ、護衛駆逐艦ノ爆雷攻撃ニヨリ危機ヲ脱ス。

〈筆者注　駆逐艦「潮」が撃退〉

カクシテ第一ノ難関ヲ無事ニ通過、部隊ハ下関海峡ヲ通ッテ瀬戸内海ニ入リ、豊後水道ヲ経、佐伯湾デ一夜ヲ過ス。

12月16日　涯シナイ大洋ヲ南ニ向カッテ航行中。本土ニハ一歩モ印シ得ズ。

12月18日　本日モ依然、南進ヲ続行。コノ三日間、全ク島影ヲ見ズ。海以外ニ見エルモノハ我ガ船団――輸送船四隻護衛駆逐艦ノミ。

12月23日　日本ヲ出テカラ一週間以上ニナルガ、一ツノ島サエ見ナエイ。現在ハ「グアム」ノ西ニアル模様。

12月24日　目的地「トラック」ヘ向カッテ南進中。戦艦一隻（筆者注「大和」）駆逐艦二隻ガ、我ガ船団ヲ過ギテトラック方面ヘ向カフ。

12月25日　船団ハ東ニ航進、明日トラック着ノ予定。報ニ依ルト、昨日出遭ッタ戦艦ハ敵潜ノ攻撃ヲ受ケタル由、我々モ直チニ対潜警戒ニ入ル。「トラック」ヘノ安着ヲ祈ル。

12月26日　終ニ「トラック」ニ安着。

12月27日　昨夜ハ港口（南水道）ニ碇泊、今朝入港（フェファン島＝秋島）。港内ニハ船団ヤ各種ノ艦艇ガ在泊中。〇八二〇空襲警報発令サレルモ、海軍機多数アルタメ心強シ。今夜ハ灯火管制モナイ。

12月28日　夕刻、部隊ノ任務ガ示サレ、此処カラ船デ三～四日デ達スルマーシャル諸島「ブラウン環礁」ヘノ派遣ガ決マル。マーシャル諸島ニ関スル説明書ヲ受領シテ研究スル。

同旅団の任務は、マーシャル海域における「機動攻撃予備軍」の性格が強く、クェゼリン環礁を基地とした敵上陸地点への〝キリモミ逆上陸〟にあったと考えられる。九月十二日付の第四艦隊「秘令第四百十六号」も、十一月末（当初進出予定）までに、クェゼリンに四〇〇〇名収容の兵舎建設を命じている（旅団の総員は三九四二名）。だが、旅団のトラック到着と同時に第四艦隊司令長官（小林仁中将）は、左記の部署（旅団主力のブラウン配置）を下令している。

【ブラウン環礁】
海上機動第一旅団主力（左記の部隊を除く）

【ウオッゼ環礁】
第二大隊（大隊本部、第四中隊、第六中隊欠、旅団工兵隊一コ小隊、旅団通信隊の有線一コ、無線二コ分隊配属）
★大隊長　阿蘇太郎吉大佐

【マロエラップ環礁】
第二大隊第六中隊（旅団衛生隊一コ分隊配属）
☆中隊長　佐藤政雄大尉

【クェゼリン環礁】
第三大隊第七中隊（第三大隊迫撃砲中隊の一コ小隊配属）
☆中隊長　露木健造大尉

旅団は、十二月三十日、第二分団と分かれてトラックを出発、一月四日ブラウン環礁に到着した。再び、『塩野谷日記』から引用する――。

12月30日　出航準備完了。船団中ノ二隻ハ一二〇〇クサイ島ニ向ケ出発。我ガ隊ハ一五三〇但島丸デ「トラック」ヲ出港「ブラウン」ヘ向カフ。トラック～ブラウン間ハ危険水域ト聞カサレ、無事ヲ祈ル。（筆者注　南洋第二支隊も同日正午日蘭丸、良洋丸に乗船トラックを発ち、一月三日クサイ島に上陸した）

12月31日　大晦日ダ。色々ナ想イ出ガア

ル。（中略）回顧スレバ、独立守備隊ガ編成サレテカラ既二十年ノ歳月ガ経ツ。自分ハ、八年間ヲ満州デ勤務シテ来タ。今後ノ機動部隊ノ命運ニ幸アレト祈ル。

1月4日　一一三〇ブラウン環礁ノ東水道ニ入リ、「エンチャビ」島ニ到着。一五〇〇南洋諸島ニ第一歩ヲ印ス。小休止ノ後、全員作業ニツク。

1月6日　「エンチャビ」上陸後、我々ハ明日更ニ「メリレン」島ヘ行ク。

1月7日　〇九〇〇甲板ニ集合。矢野部隊長カラ別弁ヲ受ケ、一二〇〇「メリレン」ニ向ケテ出航シタガ、強風ノタメ曳船困難トナリ、本日ノ出発ハ中止。

1月8日　〇六一〇「メリレン」着。〇九〇〇上陸、直チニ揚陸作業ニ着手。時間ガ限ラレテ居タノデ、多忙ヲ極メタ。但島丸ト日美丸ハ、一六〇〇「クェゼリン」環礁ニ向カッテ出航セリ。

移動部隊を乗せた「日美丸」は一月十日、「但島丸」は一月十一日クェゼリン環礁（米軍爆撃の直後）に到着、全員下船。このうち機動第二大隊（第三大隊第七中隊、旅団工兵中隊の二コ小隊、通信隊の一部を配属）は、クェゼリン、ウオッゼ、マロエラップの配備を南洋第一支隊第二大隊と交代するため、主力はクェゼリンに待機（二月四日、同環礁にて玉砕）した。

大隊本部先発隊（塚基次大尉以下一〇名）と第四中隊（秋元輝一大尉以下一九六名）は、駆逐艦「海風」に乗船して一月十二日ウオッゼに到着。第六中隊（佐藤政雄大尉以下二〇九名）は引続き駆逐艦「潮」に乗船、一月十二日マロエラップに上陸した。

旅団主力、ブラウンに展開

一方、ブラウン環礁に上陸した西田少将は、同環礁が殆んど無防衛であることを知り、直ちに全環礁を偵察後、旅団司令部をメリレン島（一四七六名）、エンチャビ島（一二七六名）、エニウェトク島（八〇八名）に三分、各島に軽戦車三台を配して展開命令を下し、一月二十八日には、旅団の「守備要領」を策定して、各島守備隊に示達した。（米側押収資料より、傍線筆者）

Ⅰ. 旅団ハ各守備島ヲ絶対ニ確保シ、泊地及ビ海軍諸施設ヲ掩護スル。旅団直轄部隊ハ情況ニヨリブラウン環礁ノミナラズ、マーシャル方面ノ他ノ島嶼ニ対スル出動ヲ準備スル。

Ⅱ. 各守備隊ハ、概ネ一ケ月デ野戦陣地ヲ完成シ、ソノ後工事ノ増強、一部永久施設ノ増設ニ努メル。

Ⅲ. 陣地編成及ビ構築ニ当ッテハ、四囲ニ対シ防禦出来ル堅固ナ陣地ヲ構築シ、配備ノ重点ハ外海ニ指向スル。

Ⅳ. 地形上枢要ナ拠点ヲ占拠シテ陣地ヲ構築、ソノ配置ニ当ッテハ海岸線、海底、水深等ニ留意シ、敵上陸可能地点ニハ障害物ヲ設ケ、敵兵ノ分散ヲ可能ナラシムルヨウ努メル。

Ⅴ. 敵ノ砲爆撃ニ対シテハ、努メテ掩蓋式陣地、洞窟式待避壕及ビ格納庫ヲ設ケ、重火器陣地ハ、同一任務ノ為四箇以上、個人ノ掩体ハ七米以上離ス。損害を最小ニ抑エルタメノ偽装、散開、展開ニ留意シ、敵ヲ欺瞞スル為ノ偽装陣地ヲ設ケル。

Ⅵ. 防禦方針ハ、敵ヲ水際ニ撃滅シテソノ上陸企図ヲ粉砕スルニアル。又、敵ヲ側背カラ攻撃デキルヨウ準備スル。

Ⅶ. 昼間ハ陣地ヲ利用シテ成ル可ク損害ノ減少ニ努メ、夜間ノ奇襲ニヨリ敵ヲ圧倒スル。

「守備要領」は、このほか重火器や地雷の使用法、対空戦闘要領などの指示に及んでおり、各守備隊長に対しブラウン到着後直ちに防衛計画を立て、一月十五日までに各島守備に関する立案書を提出するよう命じている。

――米軍では、ブラウン環礁を環礁内最大の島エニウェトクの名をとって「エニウェトク環礁」と呼んでいた。

現地語でエニウェトクとは「西と東との間の地」を意味しており、原始的ミクロネシア人にとっては、独木舟で西から東へ長い航海をする際の寄港休養地にすぎなかったが、米海軍大学その他の戦略家たちにとっては、以前から、日本本土をめざして東から西へ進撃する際の重要な戦略拠点として〝強い関心〟が寄せられていた。

しかるに日本海軍は、昭和十七年末までは、ブラウンを軍事目的には使用せず、翌十八年三月になってようやく全長一〇〇〇メートルの滑走路が「エンチャビ島」に完成していた。

環礁の警備は、十八年一月、クェゼリンを基地とする「第六十一警備隊」から派遣され、エンチャビ島とエニウェトク島に配置された少数の監視哨によって開始され、同年十月七日ごろ同警備隊分遣隊（小淵正則兵長以下六一名）が環礁防備のため上陸、エニウェトク島上の監視哨や、エンチャビ飛行場の警備についた。主要装備といえば十二糎砲二、十三粍高射機関銃二のほか、軽機二、若干の小・拳銃、手榴弾があるにすぎず、この名目だけのわずかな兵力は、マーシャル群島西北部に対するわが方の関心の遅れを、如実に反映するものであった。

それだけに、旅団の上陸によって環礁内は、一挙に慌ただしくなった。

米軍資料によると、米軍来襲時（二月十八日）、同環礁の守備に任じていた旅団主力およびその他の在島将兵、民間人の総数は、次のとおりである。

海上機動第一旅団主力	二、五八六名	
同部隊軍属	九五名	
海軍第六十一警備隊分遣隊	五九名	
航空部隊（引き揚げ途中）	一五〇名	
測量隊（海軍士官指揮の民間人）	五〇名	
施設部隊	三〇一名	
山九会社の労務者	二〇〇名	
合計	三、四四一名	

旅団のブラウン上陸の約一〇日後、持久戦に必要な作戦資材の確保、糧食の補給、自給体制の準備、人事などの連絡のため旅団副官の牧野薫中尉（のち大尉）が内地へ派遣された。

だが、同大尉が連絡任務を終えてトラックに帰着したとき、すでにクェゼリンは玉砕し、ブラウン守備隊もまた米上陸部隊によって蹂躙されつつあった。戦後、牧野氏は、次のように回想している。

『陸上は、若干の椰子または多少の樹叢がある程度で、土工作業は頗る容易なので飛行場の建設には極めて好都合であるが、湧水のため土地を深く掘開せねばならず、陣地設備のためには、島嶼の地積狭隘と相俟って著しく固難であり、特に防禦陣地において不利なことが、これら

島嶼の一大特徴である。また、魚類は何らかの方法をもって自給を計れたが、その他の物糧自給は殆んど不可能に近く、一度守勢に陥るや、その補給上の困難は著しいものがあった。無人島にして、攻勢に易く、守るに難い一般的地勢ということができる』

『米軍来襲時までには、飛行場以外は見るべき防備施設を構築し得ず、簡単な塹壕程度のものであって、その熾烈なる砲爆撃に対して到底耐え得るものではなかった。装備も〝海上機動〟という名ばかりで、一般陸軍部隊の装備に大発動艇五隻を配属したに過ぎず、機動能力全く無きに等しい状態であった』（防衛庁戦史部資料より、傍線筆者）

ブラウンに進出はしたものの、海上機動反撃やキリモミ逆上陸という海上機動族団本来の〝機動力〟は、無きに等しかったというのである。

そして、この時期、横須賀で編成された青山英夫大佐以下の「第六十八警備隊」（既述）のほかに、ブラウン環礁をめざして進出中の一兵力があった。

一月二十九日、「大陸令第九百二十三号」によってこの族団に編入された「輸送隊」（村田光慶中佐以下一五五八名、編制表参照）である。だが。この輸送隊も結局は、ブラウンには到達し得ず「海上機動」は全くの有名無実に終わるのである。

この旅図輸送隊は、フィリピンのイロイロ島（バナイ島）に駐留中の「独立工兵第二聯隊」を改編したもので、旅団主力と合流するためフィリピンを出発、二月七日パラオに到着した。だが、マーシャル方面では、すでに二月一日から米軍の進攻が開始されていたため、ついに本隊には追及し得ず、その後、パラオに進駐した第十四師団長の指揮下に入った。

輸送隊主力は、その後、所在の歩兵第十五聯隊、歩兵第五十九聯隊第二大隊とともに「集団機動部隊」に編成され、パラオ本島西方カラマド湾周辺（ガスパン）にあって、パラオ諸島内の海上および陸上機動反撃作戦に当たることになる。

マーシャルの日本軍機壊滅

ところで、ギルバート攻略後、米軍はいかなる進攻路をとってくるのか、その時期はいつか――は、わが方にとってきわめて重大な問題点であった。

ギルバートの失陥によって、米軍従来の進攻路線であるソロモン諸島→ニューギニア→フィリピンに向かうルートに加え、ギルバート→マーシャル→カロリン諸島群を経てフィリピンに達する新たな進攻路線が、今や現実の問題となって表われてきたからである。

そのいずれもが、終局においてフィリピンを占領し、わが南方への輸送動脈を遮断せんとするものであったが、とくに後者は、中部太平洋におけるわが海軍の根拠地を掃蕩し、かつ日本本土を直接空襲する大型機の航空基地を獲得できる点において、いっそう致命的な重要性をもつものであった。

しかも、彼我の兵力比からすれば、米軍は二方面作戦を同時に遂行し得る余裕があるのに反し、わが方は、南東方面作戦に対する所要兵力の充当にさえ困難を感ずる状況にあり、今後、敵が二つの路線の何れに重点を置いてくるのか、あるいは二方面にわたって同時に、または交互に進攻してくるのか――その判断並びにそれに対応する兵力配備の決定は、きわめて重大かつ焦眉の問題であった。

この時期、南東方面作戦の状況はどうであったか。

敵は十月十二日モノ島に上陸、次いで十一月一日にはタロキナに大規模な上陸作戦を開始（既述）して、同方面に強固な航空基地を建設。十二月十五日にはさらに北上、ニューブリテン島の西南岸マーカス岬に大挙上陸を開始した。

マーカス岬はダンピール海峡の東口を扼する要衝で、ラバウルからわずかに約三六〇粁、しかもラバウルとは陸続きにあった。この上陸作戦を、ラバウル攻略戦の開始と判断した現地では、ラバウル航空隊が直ちに反撃に移り、聯合艦隊司令部もまた、トラックに待機中の約六〇機をラバウルに増強した。

だが、十五日から約一週間にわたる連日の攻撃によっても、ついに敵の橋頭堡を叩き潰すことはできなかった。

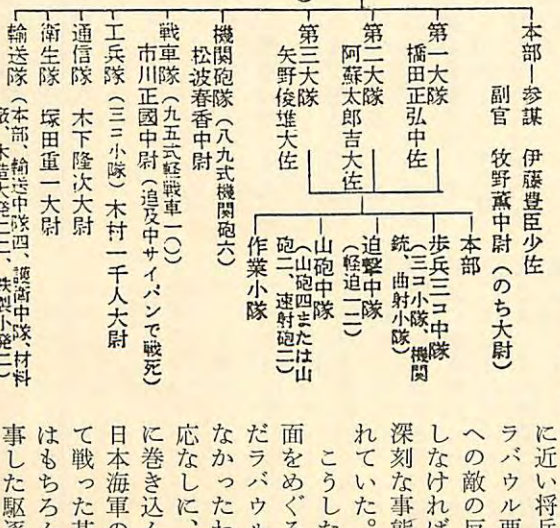
次いで敵は、二十六日ツルブに上陸、翌十九年一月二日にはニューギニアのガリ付近にも上陸を敢行して、完全にダンピール海峡を制するとともに、ラバウル包囲の態勢を完成するに至った。

――いまや、ラバウル航空要塞を扇の要とする南東方面は、ずたずたの状態となった。十八年初頭にはまだソロモン群島の南端にしか及ばなかった敵の制海権は、ついにラバウルそのものの咽喉元をさえ脅かし、水上部隊は意のままに跳梁して付近のわが基地に攻撃を加え、魚雷艇は遠くニューギニアの北岸のマダン海岸にまで出没した。

ラバウル航空隊は、まだ百数十機を残していたが、その制空権はいまやラバウル上空に限られており、一〇万名に近い将兵が集結するラバウル要塞そのものへの敵の反攻すら覚悟しなければならない、深刻な事態に追い込まれていた。

こうしたソロモン方面をめぐる戦局は、まだラバウルを諦め切れなかったわが海軍を否応なしに、その消耗戦に巻き込んでいった。

日本海軍の主兵となって戦った基地航空部隊はもちろん、輸送に従事した駆逐艦、潜水艦を次から次へと消耗し



ただけではない。その年の大晦日には聯合艦隊の母艦機四〇機を、さらに一月二十五日にはとっておきの「第三艦隊」の母艦機約一三〇機（急降下爆撃機「彗星」を含む）をも、惜しみなくラバウル戦線に注ぎ込んでいった。

これによってラバウル航空隊の兵力は再び三〇〇機にふくれ上がったが、数ケ月前の悪夢のような「ろ」号作戦の大誤算（既述）にも懲りず、再度にわたって〝虎の子〟の母艦航空兵力をラバウル最後の抵抗戦に投入し、虚しくすり減らしていったことは、その後の聯合艦隊の作戦に重大な影響を及ぼさずにはおかなかった。

聯合艦隊作戦指導部の目は、激しい戦いを連日のように続けているラバウル方面に、依然として強く引きつけられており、ギルバートに対する敵の反攻がその後の〝主進攻〟の第一歩であることへの洞察を欠いていた。――というより、ギルバート作戦で米空母に多大の打撃を与えたとする報告を真にうけて、聯合艦隊は、敵の中部太平洋における次期進攻作戦の開始は相当遅れるものと信じ込んでいた。

ギルバート玉砕の直後、古賀長官に伝えられた軍令部の新作戦方針も、それを裏書きしている。

『ギルバート方面ニ集中セル敵機動部隊ハ、少ナクトモ同方面敵ノ拠点概成スル迄ハ之ニ釘付ケサルル算大ニシテ、之ヲ捕捉撃滅シ得レバ、爾後敵ノ企図ハ相当長期ニ亘リ大ナル制肘ヲ受クベク、此ノ間我ハ航空母艦並ビニ基地航空兵力ヲ整備シ得テ必勝ノ態勢ヲ確立シ得ル次第ヲ以テ……（以下略）』（十八年十一月二十六日、公刊戦史より）

ギルバート諸島の次は当然、マーシャルへの来攻が考えられていいのに、当分その気配はあるまいという判断である。

ギルバート作戦は、米軍にとって、終局目標であるマーシャル群島占領の〝序曲〟にすぎなかったのに、聯合艦隊作戦指導部は、南東方面からの進攻路がなお敵の主要作戦線であると判断し、ギルバート失陥後においても、敵の新しい進攻路がすでに〝中部太平洋突破〟に決定していたことには、まるで気ずいていなかったといっていい。

だからこそ、年が明けてラバウル方面がすでに絶望的となっていた時期にまたしても、とっておきの母艦兵力を同方面に注ぎ込むという重大な誤謬を冒したのである。

したがって、マーシャル群島に対する激しい新攻勢が、中部太平洋からの大反攻の前触れであることが歴然となり、中部太平洋こそが、太平洋戦争の〝正念場〟であると遅まきながら悟ったときには、頼みとした決戦航空兵力はもはや、作戦を実施できる状況にはなかった。

余りにもラバウル中心の南東方面に固執しすぎたことへのリアクションは、その後、想像を絶する窮地にわが聯合艦隊を追い込んでいくことになる。

――その間も、マーシャル群島方面に対する敵の不気味な蠢動は続いた。

太平洋上の四〇万平方哩以上の海域に分散する三二の群島と八六七の珊瑚礁から成るマーシャル群島は、その心臓部にわが最大の戦略基地「クェゼリン環礁」を擁し、その周囲を南方のヤルート、ミリ島、東方のウオッゼ、マロエラップ島など、航空基地をもつ島々が掩護していた。

それだけに、これらの四島を一気に素通りして、マーシャル群島の心臓部を直接攻撃するというニミッツの大胆きわまりない〝蛙跳び作戦〟は、寝耳に水の大本営を打ちのめした。それは、戦争の進展を数ケ月も早めるほどの決定的な痛打であった。

大本営にとっては、この時期、敵がマーシャル群島に来襲すること自体が驚きだったが、たとえ来攻するにしても、この時期の来攻機数からして、まずミリ、ヤルート島が目標になるものと判断していた。

マーシャル群島に対する敵の攻撃は、十九年一月初め、エリス島とギルバート諸島の新しい米軍飛行場から作戦するジョニー・フーバー少将指揮の陸上航空隊によって開始された。同部隊所属の四七五機が絶え間なくマーシャル群島を叩き続けていくのに呼応して、同月二十九日には、マーク・ミッチャー少将指揮の第五八任務部隊（高速空母機動部隊）が、攻撃に任ずる七五〇機を搭載してマーシャル海域に到着した。

フーバー部隊がミリ、ヤルートの制圧作戦を続行中、一つの空母群はマロエラップを、他の一つはウオッゼを、他の二群がクェゼリンを空襲、一回の攻撃によって環礁にあった日本機のすべてを破壊した。

また、二十九日夜には、第五八機動部隊の射撃艦が、ブラウン環礁からわが方の飛行機を発進させないよう「エンチャビ島」の航空基地を攻撃した。――米攻機数はミリ（六〇六機）、ヤルート（一七六機）、マロエラップ（三七四機）、ウオッゼ（一八四機）、クェゼリン・ルオット（一三八機）であった。

この米空母機の攻撃によって、一月二十七日時点でマーシャル群島にあった可動日本軍機約一五〇は、三十一日には皆無となった。「マーシャル群島の防衛を担当する第四艦隊は、単なる残骸に過ぎなかった」と、モリソン戦史には記されている。また防衛庁公刊戦史は、この時期の聯合艦隊の状況判断を次ぎのように記している。

十二月二十八日、聯合艦隊参謀副長が上京して、当面の作戦指導について軍令部と打合せの結果、聯合艦隊司令部は『航空部隊ノ再建及ビ艦艇ノ整備等反撃力倍養ノタメ、従来通リノ聯合艦隊全力ヲ集中シテノ「Z」作戦ハ二月上旬マデ企図セズ、中部太平洋方面ニ米軍ノ来攻ガアッタ場合は、オオムネ所在兵力ヲモッテ対処スル』ことで軍令部との間に意見の一致をみた模様である。なお、そのためには、第一線各部隊の玉砕の覚悟および各部の理解と協力を要望せざるを得なかった。（戦史叢書六二巻、『中部太平洋方面海軍作戦（2）五〇七ページ』

――だが、それら第一線部隊の玉砕という余りにも虚しい犠牲の代償として、わが聯合艦隊が得たものは、果たして何であったのだろうか。

＜以下次号＞

島は八百マーシャル群島（1）

昨年九月、財団法人南洋群島協会から「南洋紀行・赤道を背にして」と題する貴重な書物を寄贈されました。

新潟県出身の著名な文士能仲文夫氏著の南洋群島紀行文に、昭和十四年度版南洋庁発行の〝南洋群島要覧〟と、〝昭和十年度版南洋群島地図〟を、同協会の小菅輝雄常務理事が編纂・復刻したもので、今となっては信託統治の頃の良き時代の南洋群島を知る一級の文献です。

能仲文夫氏は昭和五十八年十月に逝去されましたが、氏と親交のあった小菅常務理事の御了解を頂きましたので、私共に関係の深いマーシャル群島の項から抜き出して御覧頂きます。紙面の関係で一部を割愛したのは誠に心残りです。

◇　◇　◇

マーシャル群島はポナペ島から約七百六十哩の地点で、その島の数も大小合せて八百余島あってこの島全部が一大環礁の中に横たわっている島だが、更にこれをもっと詳しく言えば、ヤルート島のジャボウルといって、ここにヤルート支庁もあり病院もあり学校もあり局もあって、群島では一番文化的の風が流れている島である。

船はクサイ島を出帆して二日目半にこのジャボウル島の沖合に入港する。沖合から見るジャボウル島はまるで紺碧の海面へ緑の細長い帯でも引いたように、はっきりと浮かんでそれが殆ど海面とすれすれになる程低かった。こんな不安気な島に一体人が住んでいるのかと思う程であるがそれでも日本人が三百七、八十人住んでいるというのだ。ジャボウルは独逸時代には、ここを本拠としたので、早くから拓けた島で、今でも独領時代の建物が幾多残っている。

マーシャル群島が発見されたのは西暦一五〇〇年代で、これを世間に紹介されたのは一七八一年で英人船長マーシャルの探検に始まっている。つまりマーシャル群島というのも、この英人船長の名をとったものだ。ところが当時その領有の根拠が薄弱であったためその頃、植民地獲得に血眼になっていたドイツ人は、一八八七年（一説には一八七八年）に軍艦を群島に派遣してマーシャル群島はドイツのものなりと宣言してドイツの領土としてしまった。

次いで一八八八年、英独が協商の結果ギルバート諸島を英国に、マーシャルとナウルの燐鉱島を独領と定めて群島の開発に主力を注いだ。かくて一八八七年に半官半民のヤルート会社を組織し総ての行政権を与えて南洋全群島を統治した。この間、独逸はニューギニアに総督を置き、また或るときはポナペに政庁を置いて統治に当たったのである。何れにしても、このマーシャル群島はドイツにとっては最初の根拠地であっただけに、ヤルート島だけは当時から他島とは比較にならない程、早くから拓けていたのである。

私は島へ上陸して支庁官舎に一休みすると直に島見物に出かけたのであるが少し歩けばもう鼻の先がつかえた。島の長さは一千米、幅は狭いところは半町そこそこで島の真中にたって左右を眺めると渚が見られるという心細さがあった。島はやはり海上から見たと同じでやたらに低く、少し波があると島より海の方が寧ろ高くなるという。群島の経済調査にマーシャルまで行くという私の親友野村商事の支配人、陰山君と偶然にも東への旅行が一緒だったので、私は陰山君の同行者石橋君と三人で島から島を限なく歩いた。島全部を歩き回っても三十分とはかからなかった。

「これが赤道直下のマーシャル群島か、アハハー」

陰山君は呆れたような声を出して笑った。事実陰山ならずとも、この私までが、あまりに小さい島なので呆れていたところなのだ。街にはコプラの仲買商や雑貨商があり、部落の真中には大きな撞球場が二軒あった。

波と風の非常時の島

私は支庁長の谷信吉君の好意で支庁長舎に旅装を解いた。支庁長舎は独逸時代の総督が居を構えていたという建物で古色蒼然たるものがあるが、ペンキ塗りで建築などもなかなかしっかりした建物であった。ベランダの椅子にもたれて椰子の木の間から直ぐ真下に海が見えた。支庁長舎はこの島で一番高地にあるというのだが、一体何処が高地なのか、まるで建物が海とすれすれになっているようにさえ思われる。海抜一、二米しかないというのだから、その低さ加減も想像されよう。

「こんな低くて不安じゃありませんか」

私はあまりにも心細い島なので谷君に訊ねた。

「最初は心細かったが、近頃は慣れてなんでもありませんよ」

と谷君は一向平気の顔をしている。新参者の私のように、それ程不安を感じていたら神経衰弱になりますよ、と側からこれまた夫人が言う。谷君の話によると、実は平気だと言っても何時突然大波に襲われるか分からない不安があるので風のある晩など、目が冴えて眠れないこともあるという。なんでも四、五年前に離島のメジュロという島が大波に洗れて二百八十何名かの島民が一人残らず海の藻屑と消えたということであった。二十年に一度とか、三

十年に一度周期的に訪れる大暴風を予想しながらも島の人達は、そんな不安はないと言った顔つきで生活している。

群島の中でもこのマーシャルはコプラの産出が最も多く、全群島七千トンの産出のうち四千トン近くはこのマーシャルから産出するのだ。それだけにマーシャルはコプラに依って生きている島であるが、近年コプラ相場の下落から島の財界？は極度に窮迫してコプラ商人の中で店をたたんで内地へ逃げ帰るものがあるということであった。コプラが安ければ自然商人の品物が売れないので困っている。こうした泡のような小さな島々にもやはり人が住んでいる以上、世界の不景気が人並みに吹き捲ってくるのであった。

支庁官舎の直ぐ横にヤルート神社があって、神社の周りにはユーカリの白い花や仏桑花（註ハイビスカス）の赤い花が美しく咲いていた。カナカの部落はばらばらになっていて、渚の方には洋館の建物が五、六軒軒を並べて建っていた。これが離島の島民達が島へ遊びに来るために逗留する宿所である。大抵の島では夫々この出張旅館を一軒宛持っているのだ。

「神社へ島民も参拝しますか」

「この頃ポツポツあるようです」

谷君のいうのをきくと、いくら島民でも日本の統治を受けている以上、神社に参拝しなければ気がすまないから俺達にも参拝させてくれと頼みに来るものがあるということであった。

島にはたった一軒島人にとって唯一の慰安機関である料理屋があった。料理屋はマングローブの繁った海岸に建っていて、満潮の時には縁側まで海水が流れてくるという殆んど海の中に建っているような家である。…中　略…

ジャボウル島にはカナカだけで一千人以上も住んでいるが、このうち他島より遥かに多いのは混血児が非常に多いことである。百人近くはこの島だけでいるということであった。それにこの混血児は日本人との間に出来たものばかりでなく、白人時代の遺物もまた相当に残されている。…中　略…

島は一面珊瑚礁で出来ているので白い砂が一面に敷きつめられている。どの家の垣根にも赤い仏桑花が咲いていて、真っ白な長い簡単服を着た島の女たちが垣根に陽を避けて休んでいる。

…中　略…

カナカの社会は共産制と有無相通ずる式で、無いものにはお互いに助けあうというのが彼らの社会組織だ。私はこの島の大酋長ライランの邸宅を訪れて彼の意見を叩いた。ライランの家はパンの木に囲まれた海岸に近い処に薄茶色のペンキ塗りで建ててある洋館であった。年収四万円というから素晴しい邸宅かと思っていたら案外に貧弱なのに呆れた。

（以下次号）

お便りの中から

（ルオット）　新潟県　米田　トシ

過日靖国神社参拝の節は何から何までご心配して頂き、大変お世話になりまして本当に有難うございました。又此の度はご多忙でいらっしゃいます中を奇麗な写真をお送り頂き、何ともお礼の申し上げ様もございません。本当に重ね重ね有り難うございました。

毎日眺めて楽しかったあの日を想い出し又、友達にも自慢したりして心豊かになり身の幸せを感じて居ります。新潟にも漸く春が来まして梅の花が満開となり、夜など夜露にしっとりした花の香りが溢れてきます。こちらでは仏様も五十年の弔納めと普通言い伝えられています。私も何としても体に気をつけて、もうあと四回はお参りさせて頂き度いものと念じて居ります。

来年の四月七日、今からとっても楽しみにして待たせて頂きますので、今後共何卒よろしくお世話下さいます様お願い申します。

昨日はとってもうららかな日和でしたのに今日は朝から雨を伴った風が吹き荒れまして、折角咲いた白梅の花ビラが無残に地面に落ちています。之が本当の無情の風、早く止めばいいものを。折角ご多忙中のところ、お送り頂きましたのに、こんなに遅いお礼状なんて、それに拙ない字と文、どうぞ大目に見られてお寛し下さい。本当に有り難う存じました。失礼いたします。

※御丁寧なお便り恐縮です。来年四月、お会い出来る日を楽しみにしております。

（ルオット）　長野県　宮下　礼子

拝啓、先日はクェゼリン、ルオットの慰霊旅行の際のお写真を沢山お送り下さいまして、誠に有難うございました。立派なお写真で感激致して居ります。会長様もいらっしたのでございますね。有難いことでございます。皆様ご無事で御帰りになられました事、おめでとうございました。会長様もご苦労さまでございました。私共にまでお心を配って頂きまして大変有難うございました。

米軍当局や島の方々のご好意にて墓苑が清潔に整備されているのに驚きました。（多分これらの遺族会の方々のたゆまざるご努力の賜の所為でしょうが）。殊に胸をつかれたのは砲爆撃で見る影もなくなっている日本軍の指揮所の光景でした。正に鬼気迫るの感がございまして、涙なくしては見られない景色でした。遺族としては、こういう所が残っているということは有難いことでございます。その他、眼下に見るロイナムル島の青い海と白い砂浜やご遺族の方々の深い悲しみを秘めた表情などや遺品の数々など、涙を誘われるお写真ばかりでございました。

私も一時は参加しようとした慰霊団でございますので大変残念でございますが、お写真を拝見致しまして半ば同行できたように思われます。娘の勤子に「お前も行けば良かったのに」と申しますと「本当に行けば良かった。でも私は自分の子供が成人した暁に、何の後顧の心配がなくなった時に行く事にする」と申して居ります。私は体が老いるばかりでございますが、次の世代のものが続々と参加するだろうと思われますので、この会の存続を強く希望致します。

会長様初め役員の方々の並々ならぬ御努力により会がここまで育っている事を強く感じます。ご多忙の日々をお過ごしの会長様、どうか今後もお身体に御気をつけられて、会の発展の為にご尽力下さいますよう、お願い申し上げます。

乱筆乱文申し訳ございません。先ずは取りあえず書面のみにて御礼申し上げます。

※本会の継続には全役員が力一杯頑張ります。応援をお願い致します。勤子様には近い将来、ぜひ参加されますよう今迄の会報記録を御覧頂いて準備をして下さい。

（タラワ）　逗子市　西村　幸

母西村ヤエはタワラ島で昭和十八年十一月二十五日に戦死した西村六郎の妻ですが、現在八十七才です。私は長女で西村幸と申します。一度だけ最切の集まりに参加致しましたが、その後はずーっと出ておりません。母は高齢のため、そちらからのお知らせもあまり見ておりません。又、機会がありますれば私が出席したいと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。

※御高齢で御元気でお過ごしでしょうか。来年四月、靖国神社でお会い出来ればと存じますが。寒さ厳しき折柄、御身大切にお過ごし下さい。

（タラワ）　福岡県　青山アヤ子

もう八十才という年齢になりました思い出すのは亡き人の若い時（別れた時）の面影のみです。戦死の十八年十一月末より四人の我が子を抱え、何十年かの戦後を送りました。苦しい時、悲しい時、世の皆々様の思いやりを頂き子供も成長いたしました。

色々とご一同様、お仕事ご苦労様でございます。終戦より子供が成長するまで大変な事でしたが、四人の子供も間違った道に入らず、大学を出て（国立）何一つ心配をかけずに無事に生活しております。これも世の皆様の温かいお心のおかげと感謝致す毎日でございます。どうかご一同様、お体を御大切に……ではこれで失礼致します。

※お子様の成長まで大変だったご様子、良く分かります。でもお子様方も御母様のお心を理解され、良いお子様に成長され、お喜び申し上げます。今後も益々お元気でお過ごし下さい。

（マロエラップ）長野県　牛山　光子

いつも環礁のお便りを送って頂き、ありがとうございます。私はマロエラップ島で玉砕した牛山幸博の妹でございます。現在、主人と二人暮しです。長男夫婦は勤めの関係で既に別居、娘は嫁ぎました。

私には兄が四人居りまして当時、三人の兄が所帯を持ち、末の幸博兄が独身でした。独身の兄は世間では皆様それぞれに出征して、お国の為に尽くされているのに自分達兄弟は一人も御国の為に尽くしていない、申し訳ないと志願しました。と次々に長兄が、三兄が、次兄が出征し、長兄が北支で戦病死、次兄が帰還し、三兄がフィリピンで戦死致しました。兄様方は本当に親思いで優しく年の違う妹の私の面倒を良く見て下さいました。今でも感謝で一杯です。

終戦から四十五年、この恵まれた豊かな日本大国、移りゆく世の中を尊い命を捧げられた皆様にいつも感謝の気持で心の中で報告し、一目でも良いからこの日本を見せ上げたい、見ていただきたいと、いつも心に念じ感謝して毎日毎日を大切に過ごさせて頂いて居ります。

※細かい状況を御寄せいただき有り難うございました。今後もお便りを御願いいたします。

（タラワ）　秋田県　奥山　きの

環礁の皆様、いつもお世話様です。お世話になってから大分たちました。感謝の言葉もございません。特に五十一年十一月二十五日、三十回忌の法要を現地タラワ、マキン、ナウルで行なった時です。全ての行事が終わり現地のそれぞれの公舎や御世話になった方達に御礼参りの済んだ後、司令部跡、大砲の残骸、戦車その他の散乱の多い跡地を回り、お別れに霊砂を拾い、提燈の形をした貝を見つけ、それぞれ英霊の身変りのつもりで集めて居りました。その時、近くで作業している方が近付き、骨なら沢山あると言うので案内されたのが、政府の倉庫でした。大きな袋に四つありました。

その後、慰霊碑、平和観音（私のつけた名前）の竣工式と四回も現地に参りましたが、私達の現地慰霊はまだ終わって居りません。環礁に終わりがないのと同じだと思っております。

浮田様には本当にお世話になりました。惜しい方でした。佐藤会長様にはご苦労さまですがよろしくお願いします。会のお蔭様で主人の上司である廣田様にお逢い出来て、タラワの様子や主人の生活など色々知る事が出来ました。再確認するために、もう一度現地に行きたいと考えて居りますので、その時はよろしくお願い致します。

※役員一同、本会を長く長く次代の人達にうけついで貰いたいと頑張っております。御支援下さい。

＜読者へ御参考＞タラワの御遺骨は五二年八月、本会の慰霊団が訪島の際ジョン・スミス総督に措置をおねがいし、総督から丁重な葬儀の上旧日本神社の跡に埋葬した旨の通知を頂きました。（環礁28号3頁）

タラワの観音像は南瀛の碑の附属とし栗林顧問から寄贈されました。弥勒菩薩像と十字架と日輪を組合せ慈悲と愛と清明心を象徴としています。（環礁41号9頁、42号2頁）

南瀛の碑に

（タラワ）　千葉県　谷沢　英子

幾星霜過ぎ去り行くも悲しみは消えることなく戦跡に伏す
白砂に半ば埋れて立つ砲台赤くくち果て波寄するのみ
夫征きて四十余年何も彼も昔となりて七十路を生く
悠久の島の平和と英霊の安らかなれと南瀛の碑に
海征かばみづく屍と散りし夫老いたる吾に子等はやさしき

両親に宛てた最後の手紙

この手紙は当時、東京在住の故熊木司郎氏（七五五空所属）が昭和十九年二月六日、ルオット島で戦死の直前に両親宛に出された手紙の内容です。謹んで原文をそのまま掲載いたします。

……前略　厳寒の候その後、意外にも打ち絶え御心配お掛け致しました。御両親様を始め皆々様にはお変りなく御過ごしの事と存じます。降って私も只今の航海中に於て頗る元気旺盛であります故序に御安心願います。

十一月十四日懐しの故国を跡にして一路任務に向ひつつ途中奇跡的にも無事十一月二十四日南洋トラック島に着玆に停泊期間約二十日間、十二月十四日トラック出帆、目下マーシャルのクレ(?)ゼリン島に向い激浪と対空対潜の見張をしつつ、航海中であります。意外にも停泊中に於て任地付近のギルバート諸島航空戦、マーシャル沖航空戦を知り私も覚悟を新にしました。

マーシャル沖航空戦には私の任地基地と僅かの距離の処だそうです。大東亜戦、南太平洋方面の戦局も日々熾烈を加ふる日父には私の任地方面に対し多大なる関心注目あらん事希望致します。

十二月十九日、マーシャルのクレゼリン島着の予定、クレゼリン島から船に乗り換え約一昼夜任地基地に着です萬が一を考慮し貴重品を腹に巻きつけてロープを身につけ夜中は睡眠しないよう昼間ねて居ます。任地基地まで無事着を只管神様に祈っております。

本便が家で読まれる頃は二月頃と存じます。任地着次第部隊名記入の便りを早速致します。便りも二ヶ月に一回位家につく事でしょう。遅延も重ね重ね御承知願います。本便が家に到看するのは、乾汽船乾祥丸船員丹羽徳二君（東京京橋区西八丁堀十〜一木工業丹羽増司方）の御配慮に依りまして丹羽君が家へ寄られました折、良く私の任地方面をツブサに聞いて下さい。丹羽君が船中優遇の事を別封にあります故宜しく御願い致します。

寒い冬の東京を想えば私達の任地は（不幸中の幸）とも謂へませう。航海中でも南洋の小さな島が緑一色に映り挪子の葉が生々としているのがとても奇麗です。航海はとても暑く毎日サル又一つです。水が一日約二合、洗面の時だけです。風呂なんか中々入れません。洗濯も勿論です。仕方がないからスコールの来るのを待って体を拭いたり洗濯します。船中やこちらの島の物価は物凄く石鹸一ケ一円、酒一升二十円、ウイスキー角瓶安物二十円、ハミガキ一円、菓子一袋一円、タバコ金鵄一円これは便乗者のセリです。飛ぶように売れます。私は目下船橋に立ち対空見張飛行機射撃員となって昼間夜間警戒に当って居ります。

現地部隊着の暁は、一層頑張り基地整備員として奮闘します。十九年も正に決戦の秋、銃後も御不自由な御生活も御座いませう。私も只管身体に注意し病気の為倒れるような事は致しません。海兵団と鈴鹿で練った腕を発揮して皆様の期待に添う様努力いたします。では東京の御寒さの御生活を御案じ申し上げ且、御両親様皆様の御健康を遥かに船中より祈って居ります。先ずは拙い乍らもペンをとり近況おしらせまで。

十二月十六日正午
乾祥丸丹羽船員私室にて
御両親様　司郎拝

……

＜二伸＞

十二月十九日午後一時奇跡的無事マーシャル諸島クレゼリン島到着。何卒御安心願います。一応この島で仮入舎いたし任地へ行きます。爾今十二月十九日以後の便は、必ず二月頃到着します。日夜南方方面の戦況熾烈を加ふる日私も一層奮励致します。本日（十九日）から約二日間位で任地タロア島（注・マロエラップ環礁）へつく予定です。丹羽さんへの優遇呉れぐれも願います。只今眼前の島の美景は何とも言へません。椰子の葉が一杯展げられ嶋へ寄せる浪がサンゴショウへ真白となり何とも謂えぬ心地です。夜は少々涼しくて、内地の夏と同じです。祥便(?)

着暁は家からも一報お願いします。船中で小島町の橘辰之助（小島湯への酒井の並ノ家）の友人浅草の八百倉の近所に住む中重恵之氏（軍需部員）と逢い懐かしく語りました。

さて色々とつまらぬ事記し失礼しました。愈々二十日島へ行きます。今夜は乾祥丸で一泊。之れから丹羽さんの部屋で御……（？）……初めて知った内地の懐かしさ。毎日内地の方へ向って想いつつあります。

又つまらぬ事を記します。私と乗組した新兵さん（十月一日）で高橋三郎という千葉県農林課技師（奏任官一等勲七等で東京高農卒）といろいろ語りいづれ除隊の暁はと別れました。

人生到る処青山あり、で彼も良いこの経験を把握し大いに心の練成をして頑張るんだと言われ、私も之と同感です。

では呉々も皆様には御身大切に遊ばされますやうお願いします。

十二月十九日夜五時半

クレゼリンにて

司郎拝

御両親様

……

※熊木様の関係者を探しましたが不明でした。どなたか、御存じの方がおりましたら本会へお知らせ下さい。掲載したことのご了解を得たい、と存じますので。

1990. 7.12

マーシャル方面遺族会

会長　佐藤宗丕殿

親愛なる佐藤様

遺族会の皆様と最後にお会いしてから大部日が経ってしまいました。あなた方にお目に掛れた上，あなた方がクェゼリンとルオットをたずねられる際のお手伝いをすることができ大変嬉しく思いました。

8月8日，私はアメリカ陸軍クェゼリン環礁司令官としての責務を果し，新しい任務につくためクェゼリンを立去ることになりました。私の後任者陸軍大佐ジョンマックネイル氏を紹介させて頂きたいと思います。もしもあなた方遺族会の方々が将来何かしてほしいことがありますときにはどうぞマックネイル氏宛にお手紙を出して下さい。

重ねて申上げますが，あなた方のマーシャル諸島の霊場参拝のお手伝いのできましたことを大変満足に思っています。私共夫妻はあなた方が来訪されたときに皆様にお会いできたことを大変嬉しく思っています。このことは思出として我々の心にいつまでも残ることでしょう。

敬具

フィリップ・R・ハリス

アメリカ陸軍大佐司令官

DEPARTMENT OF THE ARMY

HEADQUARTERS, U.S. ARMY KWAJALEIN ATOLL
BOX 26, APO SAN FRANCISCO 96555

July 12, 1990

Host Nation
Activities Office

Mr. Munehiro Sato
Chairman, Marshall and Gilbert
Islands Bereaved Families Association
1-9-2 Nihonbashi Ningyocho
Chuo-ku, Tokyo, 103 Japan

Dear Mr. Sato:

Some time has passed since the last visit of the Bereaved Families Association. It was a great pleasure to have the opportunity to meet you and the members of your group and assist in your visit to Kwajalein and Roi-Namur.

On August 8 my tour of duty as Commander, U.S. Army Kwajalein Atoll will conclude and I will be departing Kwajalein for a new assignment. I would like to introduce my successor, Colonel John J. MacNeill. Should your Association seek further assistance; please address any correspondence to him.

Again, may I say that I was gratified to be able to assist in your pilgrimages to the Marshall Islands. My wife and I are also pleased to have been able to meet with you and your members during those visits. It is a memory that will remain with us for some time to come.

Sincerely,

Philip R. Harris

Philip R. Harris
Colonel, U.S. Army
Commanding

（8頁より）

そして又入れ替わり新たな編隊機が飛来、抵抗のなくなった我々を標的にしての急降下実弾射撃訓練は効果があったものと思われた。この様な連日の艦砲、爆撃を受けたウオッゼ島は滑走路は勿論の事、到る処に大穴が開き、各部隊の陣地も、そして陣地を結ぶ連絡路なども切断され歩行すら困難な地形に変わってしまった。

この様な悲惨な状況下になっても若い戦士たちは太平洋の防波堤たらんと陣地の守備に努めて居った。

糧秣の欠乏した一年八ケ月

前述の如く我等先遣隊は急遽駆逐艦に依り派兵された部隊の為、兵器、弾薬の他に携行糧秣は一週間分のみであった。上陸後の糧秣は海軍警備隊より受けねばならなかった。

昭和十八年十月頃、ウオッゼ島には海軍が約一年分の糧秣を集積していたが、その後航空部隊の増加や陸軍部隊の派遣等があり、その上米軍機の空襲激化と潜水艦の跳梁等により、昭和十九年一月七日以降、補給が困難になり一月末の総兵員、三千三百人に対し約二ヶ月分の保有糧秣となってしまったと聞く。我が部隊も一月末、米軍の攻撃が始まるまでは順調に支給を受けられたが、二月切めの爆撃以来、警備隊の保有糧秣も各所で損害を受け、その後警備隊よりの支給も思う様にいかなくなった。

（以下次号）

いま　タラワで合気道

昨年九月十二日の日本経済新聞朝刊のコラム欄、「春秋」に大よそ次のような記事がありました。

◇　◇　◇

『ギルバート諸島のタラワ島にいま一人の日本女性が二年前から住みつき、若者たちへ合気道の普及に努めている。峰岸睦子さん、五十歳、合気道五段。英語と日本語教育の専門家でアメリカの大学などで教師をしながら合気道を教えてきたが、タラワ島に日本政府開発援助（ODA）で水産学校を作るため派遣されてから、この島のとりこになてしまったという。

▼周りの海はカツオ、マグロの宝庫でありながら、島民の生活は貧しい。物質文明に汚染されず、おおらかでのんびりしているのはいいのだが万事につけてまだるっこい。合気道でも教えれば少しはシャンとするのではないか、と思った峰岸さんは自費で畳を日本から取り寄せ、友人知人から古い道着を寄付してもらい、合気道教室を開いた。

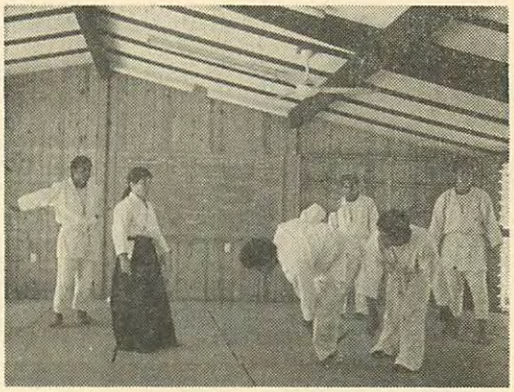
▼通って来るバス代にもこと欠くような者も多いが、今では大人と子供を含め百五十人もの生徒が集まるようになった。特に子供たちが熱心なのがうれしいという。だが現在、最大の難問に直面している。これまで借りていた南太平洋大学の体育館が使えなくなったことだ。なんとか自前の道場を建てたいのだが、資金のメドが立たない。現地では五百万円もあれば百畳敷きぐらいの道場が建てられるという。金満ニッポンから見ればほんのはした金のように思えるのだが。』

◇　◇　◇

峰岸さんは又、合気道の激しい稽古の中にも和気あいあいとした雰囲気をキリバスの方々との友好だけでなく、広く太平洋の島々の人達に広めたいと言っております。

キリバス共和国の栗林名誉領事（本会顧問）はこの計画実現のためにお世話をしておられます。お尋ねは次へ。

〒100　千代田区丸の内二―四―一
丸ビル六八四区
キリバス共和国名誉領事館
電話〇三―三二〇一―三四八七



本部だより

☆期日が変わりました

今年から定例の慰霊祭の期日が、二月第二日曜から「三月又は四月」に変わりました。環礁を見落しないようおねがいいたします。これに伴い環礁の発行日が「二月一日と八月一日」に変わりました。

☆会員名簿を作り直します

今の名簿は六十三年七月に作りましたがその後の異動が沢山ありましたので今年二月一日現在で新しく作り直します。

同封の私製はがきの名簿原稿には楷書でハッキリお書き下さい。

特に戦歿場所（島名）と所属部隊名は必ず御記入下さい。わからない時は不明とお書き下さい。会員原票をお持ちの方はそれによってお書き下さい。

☆会費完納のねがい

本会の活動に必要な経費はすべて会員と会友の浄財だけで賄われており、他からの補助等は一切ありません。会を長く続けてゆくためには財政の安定が是非とも必要でありますので、会費の完納に御協力下さい。

今後は会費を納めない方は退会の申入れあったものとして、会員名簿から削除し、会報〝環礁〟の発送を中止しますので、事情御賢察下さいまして、悪しからず御了承下さい。但し、特別の御事情のある方とは個別に御相談したいと思いますので、御遠慮なくお申出で下さい。

☆入会のおすすめ

本会は会則にもありますように、遺族であって、会費を納めた者だけを会員として登録し〝環礁〟をお届けしております。

この会のあることを知らない方が沢山居ります。お知り合いに本会をPRして下さい。マーシャル諸島とギルバート諸島方面の戦歿者の親族ならば誰でも御入会頂けます。同方面に勤務された戦友の皆様には会友として御参加頂いております。入会金は要りません。会費は一人一年間二千円です。

☆お便りをお寄せ下さい。

この「環礁」は同じ境遇の仲間たちの心のふれ合いの場として、お気軽に御利用下さい。

戦地からの便り、なつかしい想い出、家族のこと、身のまわりのこと、趣味やレクリエーションのこと、この会に対する卒直な注文など何なりお寄せ下さい。原稿は原則としてお返ししておりませんので、返却を要するものはその旨を書き添えて下さい。採否と多少の手直しはあらかじめ御了承下さい。

☆正誤訂正

53号13頁段中の「富士市」は「富山市」の誤りでした。

名簿訂正 (5)

◎ 昭和63年7月1日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

<頁>	<氏名>	<訂正事項>
36	髙橋 とし子	住所中　2—24を　2—2—24と訂正
	平形 いせこ	住所中　2—11—28を　3—11—28と訂正
37	佐藤 敏子	〒012を　019—04と変更
	杉渕 オイネ	〒016—12を　010—12と訂正
38	長岡 仙一	〒990　山形市長町2—9—7　TEL0236—81—0276　兄　仙之亟ブラウン芝補<新入会>
	古市 モト	住所を　安達郡安達町米沢字山中65と訂正
39	倉橋 たみ	住所を　荒川沖東3—12—12と変更
	鈴木 キヨ子	の次に東京より移転
	江間 正二郎	〒965　会津若松市一箕町八角中村東77—19　TEL0242—28—5270
41	森 ゆき江	〒370—01を　370—04と訂正
45	髙安 コト	63年5月31日死亡により退会
46	谷沢 英子	住所を我孫子市つくし野1—22—21と変更
47	江間 正二郎	福島県へ移転
	工藤 みを	死亡のため、姉工藤久栄（同住所）が継承
50	番場 信子	住所中　628を　3—3—1と訂正
58	松田 ふじえ	氏名を松田ふじゑと訂正
70	嶋田 チヨ	住所中　1—6—7を　1—3—3と訂正
79	南 ミツ	死亡のため削除し　南政宏が継承
	南 政宏	〒862　熊本市健軍2—24—13　長男
84	吉良 正義	住所を　光吉台1—3—39と訂正
	馬場 直人	〒847 佐賀県唐津市西唐津3—64—20 0955—73—1221 クェゼリン6通<会友として入会>

寄付者芳名

（敬称略）

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

北海道　伊藤 フジ
山形県　長岡 仙一
福島県　三浦 一郎
福島県　冨田 保
茨城県　長沢 その
千葉県　土方 フジ　雫石 ハツ
東京都　田中トメノ
神奈川県　斉田ヨシエ
新潟県　山田 八重
岐阜県　後藤 行雄　市川 市郎
静岡県　枝光 剛郎
兵庫県　内富ミツヨ
山口県　長岡 俊夫　清水 朝美
愛媛県　田中 百合
高知県　深川 芙由
福岡県　草場 マキ
佐賀県　安達シヅヨ　板浦 重雄
長崎県　山内 キク
宮崎県　丸田 キワ
鹿児島県　座波 ツル
沖縄県
会友篤志会員等　井上 義夫
香月 正紀　馬場 直人

ウォッゼ島戦没者合同慰霊祭実行委員

以上は本年5月1日から11月30日までに寄付された方で、金額の合計額は一九九、〇〇〇円でした。

事務局日誌

1月3日　靖国神社参拝
1月14日　常任幹事会（四名出席）
浮田名誉会長逝去
1月28日　役員会（七名出席）
2月4日　常任幹事会（四名出席）
2月11日　慰霊祭　総会　直会（53号）
2月15日　厚生省援護局に連絡
2月25日　役員会（八名出席）
3月16日　厚生省に現地慰霊について本会の希望を申入れる。
3月25日　浮田宅より佐藤宅へ会の資料、物品を輸送、整理
4月23日　靖国神社春季例大祭
4月28日　ウォッゼ島戦没者慰霊祭
5月13日　53号編集会議
6月24日　53号発送業務（七名参加）
7月5日　徳原徳子夫人を迎え懇談
8月5日　天皇陛下御即位奉祝委員会結成式（秋本、佐竹）
8月15日　全国戦没者追悼式（会長）
同　英霊にこたえる会慰霊祭・第四回戦没者追悼中央国民集会（黒川、佐竹、昼間）
同　東京都戦没者追悼式（秋本）
9月16日　平成3年度直会実地調査
9月24日　役員会（八名出席）
11月18日　54号編集会議（八名出席）

（1頁より）

順路　靖国神社―東関東自動車道―潮来―鹿島神宮―銚子（泊）―香取神宮―成田山新勝寺（中食）―宗吾霊堂―東関道―東京駅

乗物　往復とも豪華な大型観光バス

宿泊　犬吠埼グランドホテル磯屋
☎〇四七九―二四―一一一一

参加費　小学生以上　二万五千円
バス・宿泊・中食二回を含む

申込　二月末日迄に同封はがきに住所・氏名・年齢・性別を記入し料金を添えお申込み下さい、申込順に受付けてバスの定員に達した時締切ります。同室の希望はできる限り考慮しますので申込書にお書添え下さい。

本会が受取った申込みは旅行主催会社に取りつぎ、主催会社から申込者全員に旅行に参加できるか否かを三月末迄に通知します。

申込み後の取り消し、変更等は速やかに左記主催会社に通知して下さい。

東京都千代田区大手町一ノ六ノ一
日本通運㈱大手町旅行支店
第四課　桐谷・沖井
☎　03―三二〇一―一五九八

コース等　靖国会館で中食を済ませ、バスは首都高速、東関道を一路北東に向い潮来を経て茨城県鹿島郡の鹿島神宮に着きます。

鹿島神宮の主神は、高天ヶ原の天照大神の命によって天孫降臨の先遣隊として東国平定に大功をたてた武甕槌命（たてみかづちのみこと）です。

昔から出征の時はこの社に武運長久を祈り、旅立ちの時は行路の安全を祈り出立したので「鹿島立ち」の語が生れました。

バスは太平洋を左に見ながら南下して千葉県銚子、犬吠埼のグランドホテル磯屋に着きます。

窓の下は怒濤逆巻く太平洋、白亜の犬吠埼灯台がすぐそこにあります。

ほととぎす　銚子は国のとっぱずれ

銚子は魚のうまいところです。

お天気次第では二日目はお風呂の中で、太平洋の日の出が拝めます。

近くの愛宕山は「地球の丸く見える丘」の別称の通り確かに水平線が丸く見えます。銚子の町を後に北上すれば市原市の香取神宮です。主神は鹿島神宮の武甕槌命と共に高天ヶ原から派遣された経済、産業の守護神経津主命（ふつぬしのみこと）です。

バスはやがて成田山新勝寺に着きます。本尊の不動明王は嵯峨天皇の勅願によって弘法大師が刻んだと伝えられ、参詣客は年間七〇〇万人。開運繁昌の守り本尊です。

成田山の御護摩祈願を希望される方は、前夜にホテルで所定の申込用紙に記入し、会で一括申込みますと、後日各人のお宅に郵送されます。

中食は門前の、ドライブイン海老屋に用意されています。

次は、芝居や映画でおなじみの義民佐倉宗五郎を祀った鳴鐘山東勝寺の「宗吾霊堂」に詣ります。

阿漕（あこぎ）な重い年貢に苦しむ領民を救うため死罪を覚悟で、時の将軍に直訴し、父子五人が処刑された様子は等身大の人形十三場面と解説によってお芝居を見ているような感動を覚えます。

東京駅帰着は午後五時半頃の見込みですが、車の渋滞を考え、一時間位の余裕をみておいて下さい。

本部
〒103　東京都中央区日本橋人形町一―八―二（泉商事ビル）
マーシャル方面遺族会
電話〇三―三六六一―八七六〇
FAX〇三―三六六一―六二四一

謹賀新年

平成三年元旦

◎本会役員及び篤志会員

顧問	栗林徳五郎	篤志会員
相談役	大給湛子	同
会長	佐藤宗丕	同
常任幹事	秋本英郎	同
同	佐竹エス	同
同	昼間楽平	同
幹事	荒木常子	同
同	石谷典夫	同
同	黒川誠	同
同	高林芳夫	同
同	滝知道	同
同	山口良二	同
監事	柴崎晃	同
同	高橋鎮夫	石井清
		土屋太郎
		徳原徳子
		長谷川栄次
		長谷川敏
		浜松恒雄
		本垰和昭
		松平永芳
		村瀬松雄
		森山喜久雄
		山村要
		横溝幸四郎